さぬき市埋蔵文化財調査報告　第１集

蓑神古墳群

大川南部農免農道整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003.3

さぬき市教育委員会

さぬき市埋蔵文化財調査報告　第１集

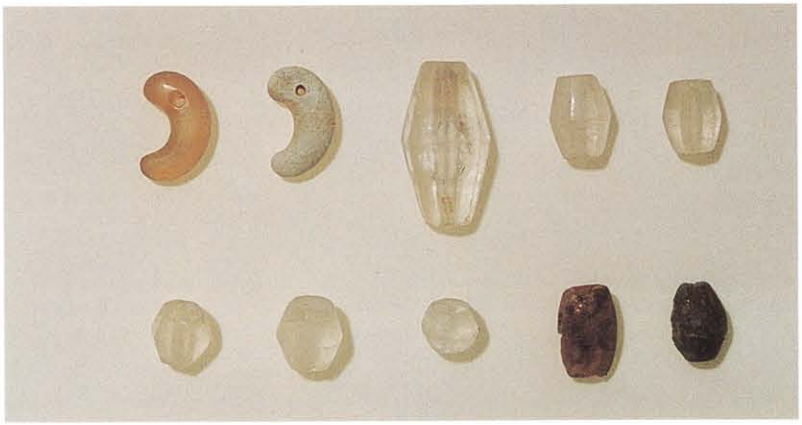
蓑　神　古　墳　群

大川南部農免農道整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003.3

さぬき市教育委員会

1　5号墳横穴式石室検出状況



2　5号墳出土耳環・玉類

序

さぬき市は平成14年4月に、志度町・津田町・長尾町・寒川町・大川町が合併して誕生しました。新世紀の始まりとともにその名を歴史に刻んださぬき市ではありますが、それぞれの町には先人たちの築いた文化遺産が数多く残されています。大地に刻まれ今日まで伝えられてきたその姿は時代時代を生きた人々の営みであり、そこに我々が今在る証を見いだすことができるのです。さぬき市教育委員会ではこうした文化遺産を、郷土の歴史と文化を理解するうえで大事であると考え、適切に保存し活用していくことに取り組んでいます。

今回報告する蓑神古墳群はさぬき市となって最初の調査で、古墳時代後期の古墳が2基調査されました。ともに横穴式石室を構築していますが、大きさや形態・副葬品などには差があり、当時の社会構造を究明するうえで重要な資料といえます。本報告書が、埋蔵文化財の保護の一助になるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが調査に際し、地元の皆様をはじめ関係各位より、多大なるご理解・ご協力を賜りましたことに対して、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

さぬき市教育委員会

教育長　　田中　浩一

例　言

1．本報告書は、大川南部農免農道整備事業に伴いさぬき市教育委員会が、平成14年度に実施した香川県さぬき市寒川町石田東に所在する、蓑神古墳群の発掘調査報告を収録したものである。

2．発掘調査費及び報告書印刷費については香川県東讃土地改良事務所が負担した。

3．調査の実施にあたってはさぬき市教育委員会が調査主体となり事務を、現場実務は大川地区広域行政振興整備事務組合埋蔵文化財係が担当して実施した。

4．本報告書の作成はさぬき市教育委員会の依頼を受け、平成１4年度に大川地区広域行政振興整備事務組合埋蔵文化財係が実施した。作業総括および執筆・編集は阿河鋭二が担当した。遺物実測および遺構・遺物の製図は多田歩、遺物整理は間嶋京子・池田朋美によるところが大きい。

5．本報告書で用いる方位の北は、国土座標第Ⅳ系の北である。縮尺は掲載図面内にスケールで示した。

6．挿図の一部に国土地理院地形図「高松南部」（1/50,000）、寒川町「平面図其の6」（1/2,500）を使用した。

7．遺物観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』を使用して表す。

8．出土遺物のうち人骨については、香川医科大学法医学教授井尻巌氏に鑑定いただき、結果を付章に収録した。

9．横穴式石室の各部左右の名称は、玄室奥壁から開口部をみた左右を使用している。

10．古墳の名称（番号）は文献により異なる。本報告書では香川県教育委員会の試掘調査結果に基づき、蓑神古墳群東支群5号墳・6号墳と呼称する。なお、寒川町史記載の蓑神東古墳群2号墳・3号墳に対応するものである。

11. 調査および報告書作成に際しては、地元及び以下の機関・方々のご協力を得た。記して謝意を表したい。　（順不同・敬称略）
香川県東讃土地改良事務所　香川県教育委員会文化行政課　(社)さぬき市シルバー人材センター
株式会社木村組　　片桐孝浩　　大久保徹也　　古野徳久

本文目次

第1章　調査に至る経緯 …… 1

第2章　立地と環境 …… 2

第3章　5号墳の調査結果 …… 9
1. 調査前の状況 …… 9
2. 墳丘と周溝 …… 10
3. 埋葬施設 …… 10
4. 墓道 …… 15
5. 遺物出土状況 …… 15
6. 出土遺物 …… 16

第4章　6号墳の調査結果 …… 22
1. 調査前の状況 …… 22
2. 墳丘 …… 22
3. 埋葬施設 …… 23
4. 出土遺物 …… 24

第5章　まとめ …… 26
1. 古墳の築造と追葬時期 …… 26
2. 石室について …… 27
3. 古墳群の様相 …… 29
4. 集落と古墳群 …… 30

付　章　さぬき市蓑神５号墳出土の人骨 …… 32

出土遺物観察表
報告書抄録

挿図目次

第１図　蓑神古墳群位置図　・・・・・・・・・・・　1
第２図　周辺遺跡位置図　・・・・・・・・・・・・　3
第３図　蓑神古墳群東支群配置図　・・・・　4
第４図　調査前地形測量図　・・・・・・・　7～8
第５図　５号墳調査後地形測量図　・・・・　9
第６図　墳丘断面図　・・・・・・・・・・・　11～12
第７図　石室及び墓道平面図　・・・・・・・　13
第８図　５号墳石室床面平・立面図　・　14
第９図　石室内遺物出土状況図　・・・・・　16
第10図　出土遺物実測図（1）　・・・・・・　17
第11図　出土遺物実測図（2）　・・・・・・・・・・　18
第12図　出土遺物実測図（3）　・・・・・・・・・・　19
第13図　出土遺物実測図（4）　・・・・・・・・・・　20
第14図　６号墳調査後地形測量図　・・・・・・・　22
第15図　墳丘断面図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22
第16図　石室検出時状況平・断面図　・・・・・　23
第17図　石室精査後平面図　・・・・・・・・・・・・・　23
第18図　石室床面平・立面図　・・・・・・・・・・・　24
第19図　出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・　25
第20図　玄室規模区分図　・・・・・・・・・・・・・・・　29

図版目次

巻頭図版1　5号墳横穴式石室検出状況
巻頭図版２　5号墳出土耳環・玉類

図版1－1　5号墳調査前状況
図版1－2　5号墳表土剥後墳丘状況
図版1－3　5号墳横穴式石室調査状況
図版2－1　玄室床面調査状況
図版2－2　玄室遺物出土状況①
図版2－3　玄室遺物出土状況②
図版3－1　玄室遺物出土状況③
図版3－2　玄室遺物出土状況④
図版4－1　玄室遺物出土状況⑤（骨Ｃ）
図版4－2　玄室遺物出土状況⑥
図版4－3　羨道遺物出土状況
図版5－1　玄室礫床検出状況
図版5－2　墓道検出状況
図版6－1　排水溝検出状況
図版6－2　周溝完掘状況
図版7－1　6号墳調査前状況
図版7－2　横穴式石室調査状況①
図版7－3　横穴式石室調査状況②
図版8－1　横穴式石室検出状況①
図版8－2　横穴式石室検出状況②
図版8－3　6号墳調査後近景
図版9　5号墳出土遺物（1）
図版10　5号墳出土遺物（2）

第１章　　調査に至る経緯

今回報告する蓑神古墳群は寒川町石田東極楽寺地区に所在する。平成6年度以来、長尾町・寒川町・大川町の南部を東西に結ぶ幹線道路として、大川南部農免道路整備が香川県によって計画されていた。当該地区においては周知の埋蔵文化財包蔵地として蓑神古墳群が台帳に記載されており、平野部に張りだした海抜70m前後の丘陵上、およびその斜面部に10基ほどの古墳が所在していたとされる。ただ、開墾・土取や木材搬出道啓開などの改変によって旧状を留めるものも少なく、近傍には破壊された古墳の石材が転がっている。このような状況の下、平成13年度に行われた県教育委員会文化行政課による試掘調査では、路線内において2基の古墳が確認された。これを受け関係機関による協議の結果、設計変更等による現状保存が不可能なため、記録保存を目的とした発掘調査を平成15年度に実施することとなった。発掘調査費用（報告書印刷費含む）については香川県東讃土地改良事務所が負担し、同所より委託されたさぬき市教育委員会が実施することとなった。なお、調査の実施にあたっては、さぬき市教育委員会が主体となり現場実務を同教育委員会より依頼を受けて、大川地区広域行政振興整備事務組合埋蔵文化財係が担当する形式で行うこととした。調査は稜線と斜面下位において確認されていた2基の古墳の全容について視認できるよう周辺の伐開からはじめ、人力による表土掘削を行った。稜線上に位置する5号墳については墳丘を確認できたが、斜面にある6号墳については石室の中ほどから大きく破壊され石材が露出し、墳丘も流出及び後世の改変によって明確にできなかった。

発掘調査体制および調査参加者は下記のとおりである。

（調査体制）

さぬき市教育委員会文化振興課

課　長　　細川　正浩
主　幹　　木村　義行（総括）
主　査　　山本　一伸

大川広域埋蔵文化財係

主任主事　　阿河　鋭二
技 術 員　　多田　　歩

（調査参加者）

真田幸雄　谷　道夫　真田サダコ　徳武愛子　筑後チヨ子　菊川ハナ子　池田泰子
田渕花子　徳武フクエ　木村豊晴　吉川義照　（順不同・敬称略）
（徳島文理大学大学院）堤徹也　（奈良大学）松下知草

第１図　蓑神古墳群位置図

第２章　　立地と環境

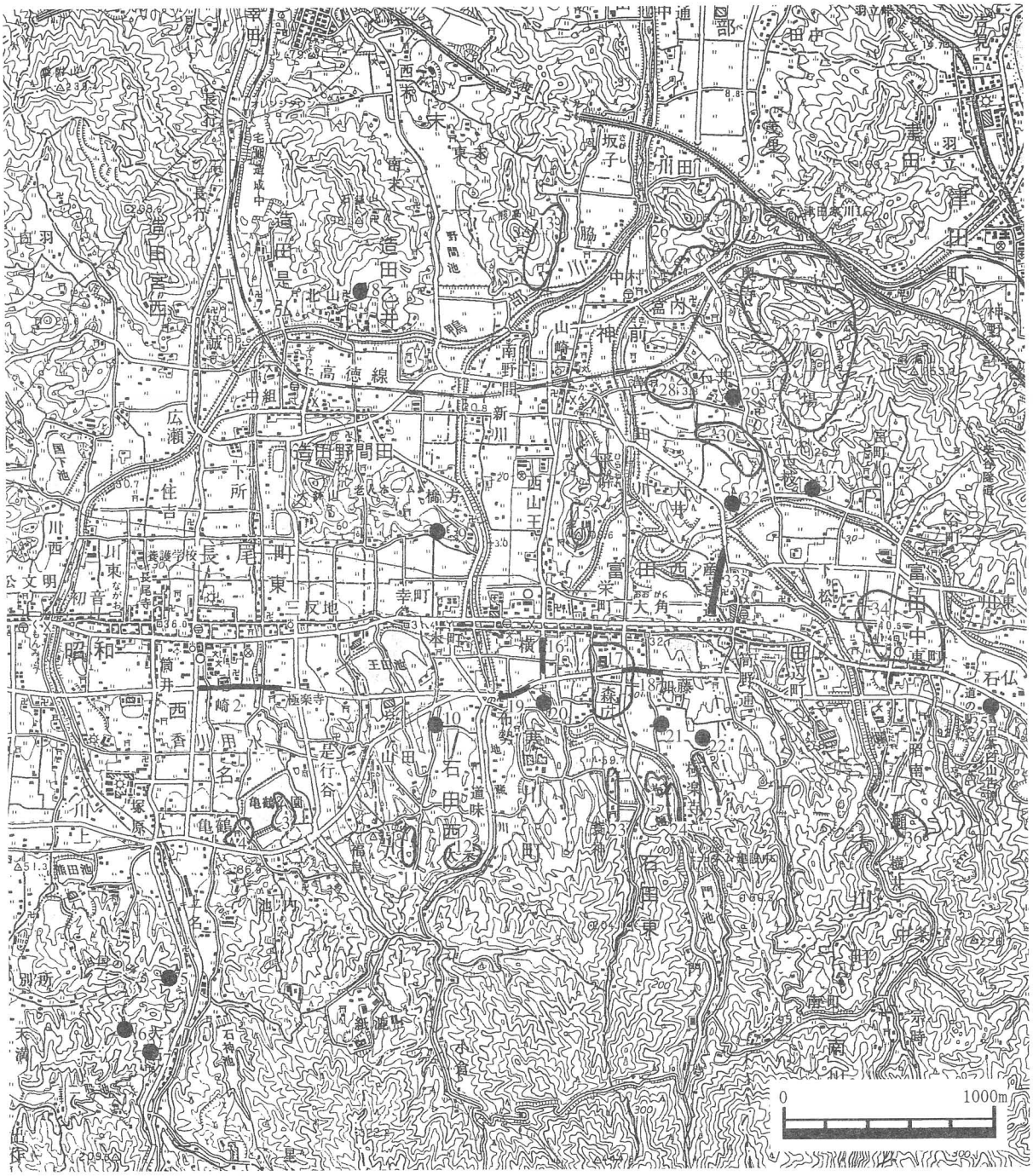
寒川町は香川県の東部を占める大川郡の西南、海岸線から10kmほど内陸に位置する。町域は南北に細長く延びる形状で、面積は約23km²である。西を長尾町、東は大川町、東北で津田町、北で志度町、南では白鳥町とそれぞれ接する。町の南部は阿讃山脈から派生する丘陵が占め、北部には町域を画する標高200mほどの山塊が所在し、これらに囲まれた低地部が平野となっており大川町から長尾町にかけて広がる。また、阿讃山脈を源とする鴨部川支流の地蔵川、津田川支流の栴檀川が町内の西と東とを北流している。

これまでのところ、寒川町内おいて旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代については不明瞭ではあるが、雨滝山西麓において草創期とされる有舌尖頭器が出土している。ほかに、加藤遺跡で後期、石田高校校庭内遺跡からは晩期の土器が出土しており、周辺において当該期の遺跡が形成されていたことが想定される。

弥生時代となっても前期では明確な遺構が確認されていない。遺物として石田高校校庭内遺跡で縄文時代晩期の土器とともに甕が、神前遺跡で前期後半の壺が出土しているくらいである。中期になると平野部周辺の丘陵や段丘上の微高地に生活域の所在がみられるようになる。遺構が確認されたのは蓑神遺跡のみであるが、環濠らしき3条の溝とともに中期末の甕が検出されている。布勢遺跡では包含層から中期末の土器が多量に出土している。天王山遺跡・極楽寺遺跡などでも土器や石器が出土している。また、石田神社遺跡周辺では、当地方において中期以降には存在しない磨製石包丁が採集されている。後期になると平野部の南端にあたる砂礫台地上において著名な遺跡が多く営まれるようになる。とくに石田地区では1911年に8点の巴型銅器が出土した森広天神遺跡、住居跡とともに扁平鈕式袈裟襷文銅鐸の破片が出土した加藤遺跡、数次にわたる調査で弥生時代後期・古墳時代末・平安～室町時代の集落跡が確認された石田高校校庭内遺跡、溝とともに多量の土器が出土した布勢遺跡、平成7年に調査が行われ弥生時代後期前半～終末までの集落跡及び墓域が検出された森広遺跡などが所在しており、広く森広遺跡群として捉えられている。これらの遺跡はそのすぐれた内容から、東讃でも随一の拠点的集落を形成していたものとおもわれる。他方、弥生時代終末期前後の墓制の特徴としては、集落に隣接するものとその周囲の丘陵上に位置するものとに区分される。前者では森広遺跡や石田高校校庭内遺跡（平成9年度）などにおいて円形周溝墓とともに土器棺墓群が検出されている。後者では雨滝山西麓の丘陵上において竪穴式石槨を埋葬施設にもった首長墓である奥10・11号墳丘墓が築造される。また、極楽寺墳墓群でも列石で区画される方形台状墓及び石棺墓群が知られている。このような傾向は隣接町でも指摘され丘陵部では長尾町八坂墳墓群・大川町大井遺跡・柴谷墳墓群、平野部では長尾町尾崎西遺跡・陵遺跡で円形周溝墓が各1基検出されている。この他、神前地区においてはズバ山・ズバ山東遺跡などで後期前半頃の土器や石器の出土が知られている。

古墳時代になると雨滝山山麓において前期古墳群が形成される。もっとも遡るものとされるのが京都府椿井大塚山古墳と同笵の三角縁神獣鏡が出土した前方後円墳の奥3号墳で、後円部に竪穴式石槨と箱式石棺の埋葬施設をもつ。つづいて大川町古枝古墳、奥13・14号墳が築造される。なお、近隣では長尾町丸井古墳、津田町鵜の部山古墳などの最古式とされる前方後円墳が築かれている。前期後半から中期前半にかけての最有力古墳は、火山産刳抜式石棺を蔵する赤山古墳や岩崎山4号墳などのある津田湾沿岸に移動し、四国最大の前方後円墳である大川町富田茶臼山古墳に結実する。富田茶臼山古墳以降には傑出した前方後円墳は造られなくなり古式群集墳が形成されるようになる。



1 蓑神古墳群東支群（今回調査）
2 尾崎西遺跡
3 亀島古墳群
4 宇佐八幡古墳群
5 椋ノ木古墳
6 丸井古墳
7 大石北谷古墳
8 北山八坂古墳
9 天王山古墳群
10 赤山古墳
11 山田古墳群
12 大末古墳群
13 熊高山古墳群
14 平砕古墳群
15 金山古墳群
16 本村横内遺跡
17 森広遺跡群
18 加藤遺跡
19 布施遺跡
20 石田神社境内古墳群
21 極楽寺跡
22 中尾古墳
23 蓑神古墳群西支群
24 極楽寺墳墓群
25 極楽寺遺跡・極楽寺古墳群
26 寺尾古墳群
27 奥古墳群
28 船井古墳群
29 石井廃寺跡
30 大井七つ塚古墳群
31 古枝古墳
32 古枝西遺跡
33 寺田産宮通遺跡
34 千町遺跡
35 富田茶臼山古墳
36 一ノ瀬古墳群

第２図　周辺遺跡位置図

北部丘陵では甲冑や家形埴輪などが出土した神前古墳を中心とする寺尾古墳群、甲冑や馬具など多様な遺物が出土した4号墳を含む大井七つ塚古墳群、南部丘陵には石田神社境内内古墳群などが所在する。ほか、5世紀代の古墳として円筒埴輪が出土している赤山古墳、箱式石棺を主体部とする山田古墳、道味古墳が知られている。古墳時代後期になるとあらたに天王山古墳群・大末古墳群・蓑神古墳群・極楽寺古墳群・相ノ山古墳群などの群集墳が形成される。また、前代から引き続き寺尾古墳群でも横穴式石室墳が築造される。大型円墳としては6世紀後半頃に築造された、東讃最大規模の横穴式石室をもつ中尾古墳、これにつづく蓑神塚古墳が知られている。森広遺跡群で検出された集落跡との関連性が窺われる。

第３図　蓑神古墳群東支群配置図

古代律令制下において寒川町は寒川郡に属し、神前郷と石田郷が設定された。古代寺院として神前郷には石井廃寺、石田郷には極楽寺が建立されていた。石井廃寺は心礎が残されており、白鳳期の八葉複弁蓮華文軒丸瓦や四重弧文軒平瓦、奈良時代の七葉複弁蓮華文軒丸瓦・忍冬唐草軒平瓦や鴟尾の破片が出土している。一方極楽寺はまず寒川町石田東の地に建立された。809年に焼亡したため824年に志度町鴨部東山において再興されたが、再度火災に遭い現在の長尾町の地に移ったとされる。明治18年、極楽寺跡地内の開墾中に唐花双鸞八花鏡・鉄錫杖が出土している。また、昭和44年には緊急調査が実施され、推定講堂跡・塔跡・回廊跡が検出され四天王寺式の伽藍配置が想定される。白鳳期から平安時代の十二葉単弁蓮華文軒丸瓦・八葉単弁蓮華文軒丸瓦や扁行唐草軒平瓦などが出土している。この時期の集落跡は石田高校校庭内遺跡や森広遺跡・本村横内遺跡で掘立柱建物跡や溝などが確認されている。森広遺跡の調査成果からは平野部周辺にみられる条里型地割が、8世紀以降に行われた可能性が指摘されている。

中世では石田高校校庭内遺跡や本村横内遺跡において、鎌倉時代から室町時代にかけての集落跡が検出されている。やがて戦国期にいたると旧寒川郡では讃岐守護細川氏の有力被官で、東讃守護代として安富氏が勢威をふるい寒川氏などと争った。本城である雨滝城は大川町・津田町とにまたがって雨滝山頂部にある。このほか町内には支城の石田城・国弘城などが築造される。

参考文献

『寒川町史』1985　寒川町史編集委員会

『大川町史』1978　大川町史編纂委員会

『森広遺跡』1997　寒川町教育委員会

『極楽寺墳墓群』1998　寒川町教育委員会

『川上・丸井古墳発掘調査報告書』1991　長尾町教育委員会

『陵遺跡』1999　長尾町教育委員会

『大井七つ塚古墳群発掘調査報告書』1992　大川町教育委員会・大川町文化財保護協会

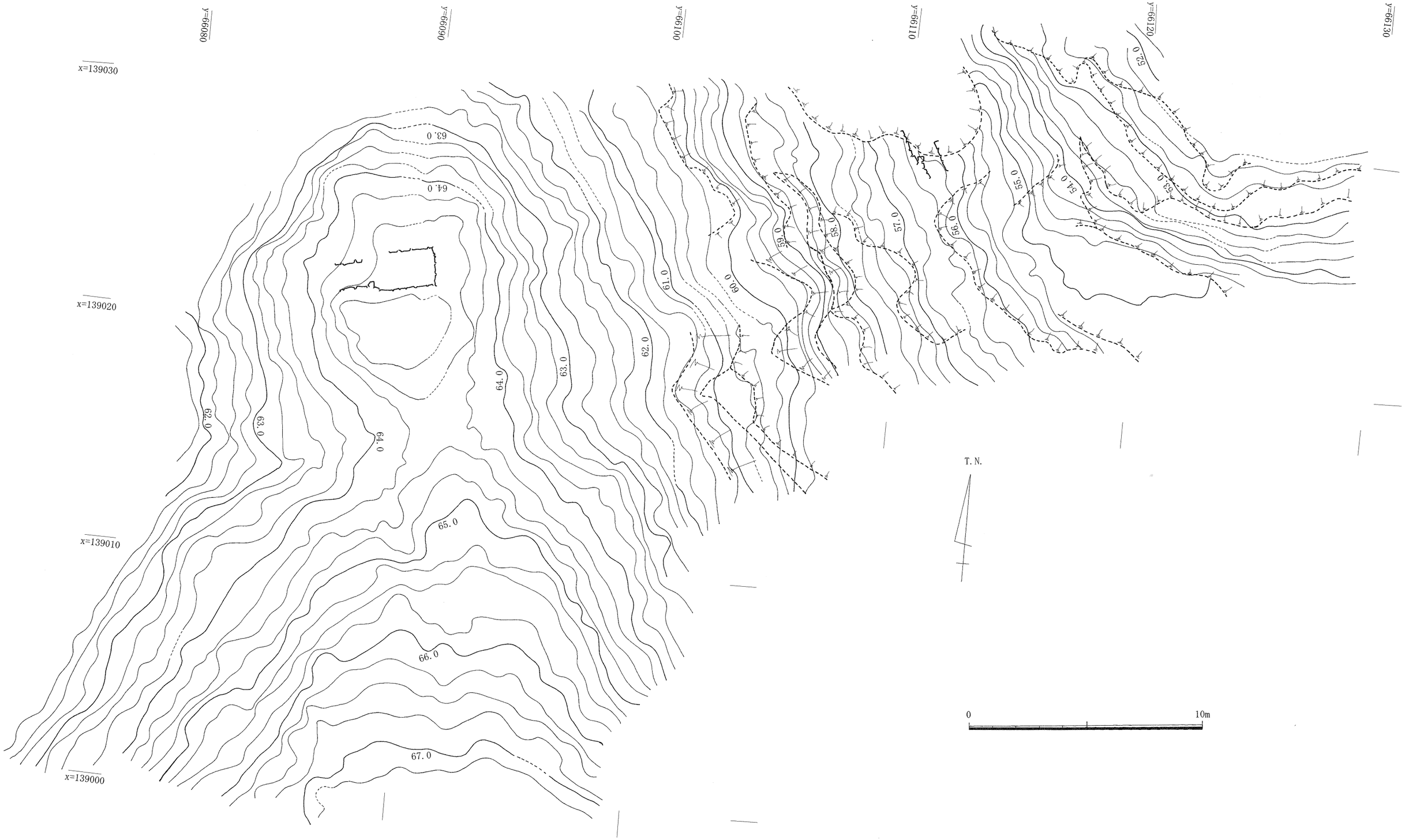
『本村・横内遺跡』2000　香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター

『埋蔵文化財発掘調査概報　尾崎西遺跡』1993　香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター

『香川の前期古墳』1983　日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会

『香川考古第3号-特集：香川の中期古墳-』1994　香川考古刊行会

『第11回特別展　讃岐の古瓦展』1992　高松市歴史資料館

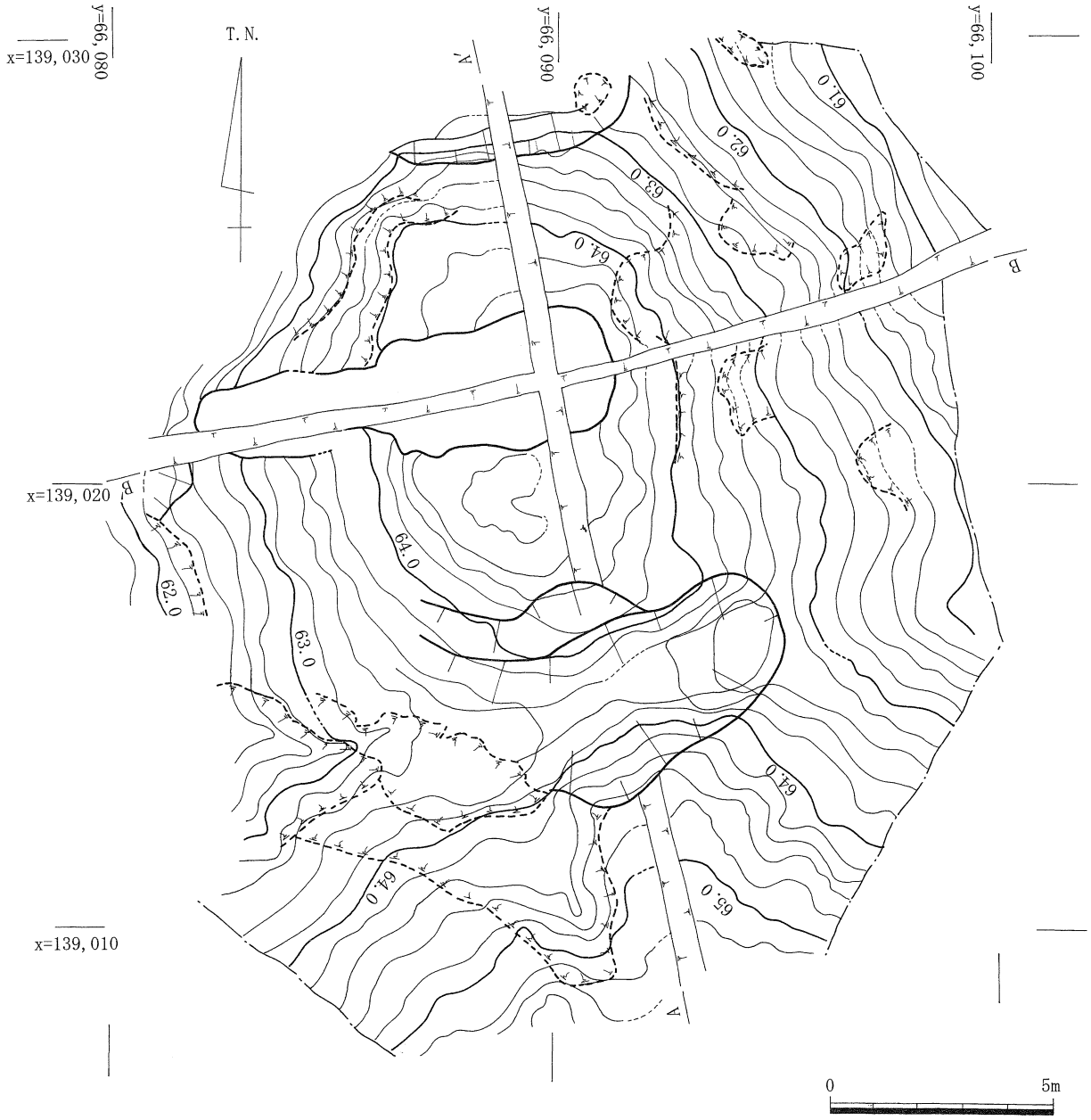


第４図　調査前地形測量図

第３章　　５号墳の調査結果

1.　調査前の状況

5号墳の所在地周辺は檜林で、東半は果樹園に造成されており灌木が生い茂っていた。試掘調査によって古墳の所在は確認されていたが、墳丘の把握は容易ではなかった。伐開後に丘陵頂部から稜線を北に下る緩やかな斜面にて、高まりを明確に確認することができた。墳丘のほぼ頂部が削平され、斜面部も改変のための起伏が多く本来の旧地形を把握するのが困難であった。なお、墳丘北西側が最もえぐられ流出し、段状の斜面を呈していた。残る墳丘の南側は小さな鞍部となっており、その両端から雨水の流れた削り込みが東西斜面を下る。



第５図　５号墳調査後地形測量図

2. 墳丘と周溝

5号墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。墳丘は表土の流出や削平によって大きく損失しており、東側斜面の墳端ラインはかなり不明瞭であった。また、北西側墳端は調査区外に延びているため、確認することができなかった。墳丘の南側鞍部に周溝が掘り込まれている。周溝は丘陵稜線を中心に約8m巡っており、平面形は緩やかな弧状を呈している。他方、墳丘北側では地山を削り出し、傾斜面を造出している。東西両端であるが、西側では墓道入口前面に地山削り出し面をこしらえている。東側についてはやや不明確ではあるが、63.0m前後にて地形変換点を確認することができ、北東側では62.8～63.0mにかけて傾斜が緩くなっている。以上から墳丘規模は東西石室の主軸ラインが長い楕円形で、長径約14.0m・短径12.6mに復元できる。

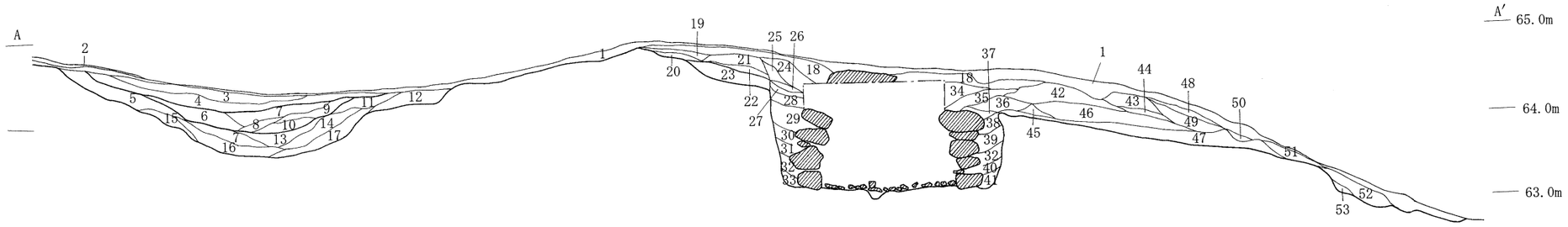
墳丘等高線の最高地点は石室の上面にならず、少しばかり南側にずれている。また、北から西側にかけてはなだらかに下る平らな地形になっており、削平が大きく及んでいることがわかる。墳丘南北横断土層からすると地山は、周溝上端から北へ64.9mまでのぼったあと下りとなる。このくぼ地状の地形変化は羨道入口付近南側でも看取され、北にかけては傾斜面となる。石室南側高所と北西側での比高差は約100cmを測る。そしてこの旧地形に対し、石室墓壙掘削前の地山整形とおもわれる暗色系の橙色土や黄色土が直上に層厚15～30cm程度みられ、上面にはうすく暗灰色土がのっている。平面的には石室の周囲約7×8mのやや歪な円形状をなしている。これより上位の盛土は残りが良くないが、地山の赤色土もしくはこれを含む橙色土を細かく用いているが、残るのは30～40cm程度である。

墳丘の南側で検出した周溝は墳丘側では部分的に2段になり、規模は最大で上段幅約5m・下段幅約3.8m・深さ約0.5mを測る。中央部断面形は逆台形状を呈し、底部は平坦に近い。両端は改変のため消失または不明確であるが、検出状況と大差はないとおもわれ半周もせずに、鞍部を断ち切るものである。埋土は大きく3層に分けることができ、上・下層群には黄橙色系土・中層群には暗褐色系土が堆積している。遺物は東側からのみ須恵器片が少量、中層群を中心に出土したのみである。他方、墳丘北側の削り出し面は、比高差約40cmで直線的に5mほど延びている。斜面堆積土から須恵器甕片や土師器細片が僅かに出土している。

3. 埋葬施設

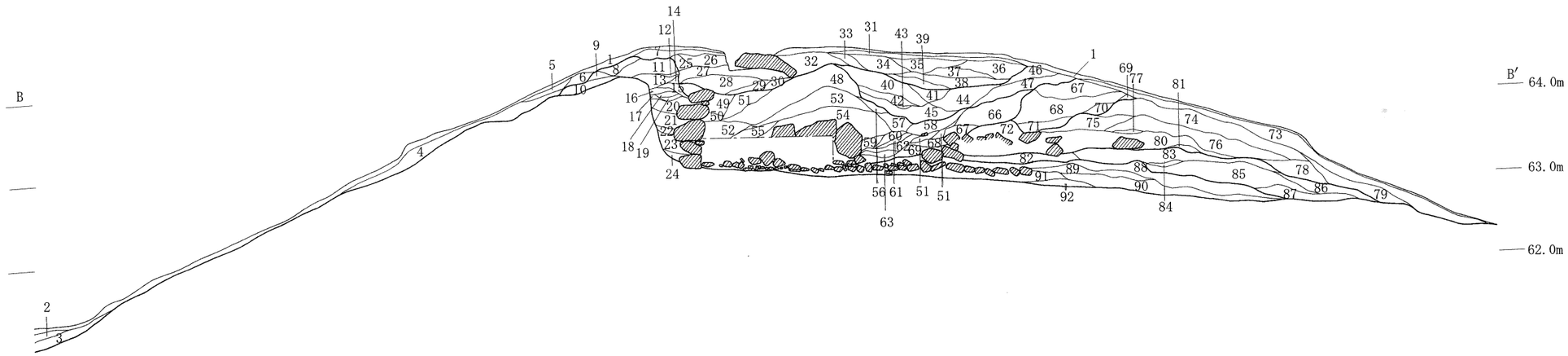
5号墳の埋葬主体は両袖式と想定される横穴式石室で、石室主軸をN-75°-Eとおおむね東西方向にとり西側に開口する。石室はこれまでの石材抜き取りなどによって改変され、すでに天井石はなく奥壁あたりが比較的残存はするが、全体的に状況は良くない。右袖石は抜き取る途中で放棄されていた。右側壁も玄室半ばから袖部にかけては基底石まで失われており、他は基底石から3段ほどを残すのみである。

壁体に使用された石材は花崗岩質の角礫で、玄室基底石にはおおむね長さ40cm・厚さ20cmの小型の石材を横口積または小口積に据えている。奥壁は基底石から上4段を残す。向かって右端2・3段目にかけてやや大きめの石材を使用するが、そうじて基底石程度の石材である。3段目上面にて目地がとおる。隅部をみると奥壁が側壁に挟み込まれるものではなく、それぞれが接するように配されている。ただ、左側壁のみ奥壁と1石目との隙間に小型の石材を斜行に配置し、隅部を形成している。側壁をみると左側で基底石7石あり、奥から6石目には一回り大きい石材を使用する。袖寄り2石はやや内側にせり出す。基底石より上は奥寄りにやや大きめの石材がみられるほかは、小型のものを粗雑に積み上げる。奥より2石目から3段目上面に目地がとおっている。右側壁基底石は6石目からを失うが、抜き取り穴からすると左側壁とほぼ同様の配置とおもわれる。



1. 表土
2. 2.5Y6/2灰黄色土（小礫多量）
3. 10YR6/6明黄褐色土（小礫主体）
4. 7.5YR6/4にぶい橙色土（小礫多量）
5. 7.5YR7/8黄橙色土（小礫多量）
6. 7.5YR5/6明黄褐色土（小礫多量）
7. 7.5YR6/6橙色土（小礫多量、やや堅）
8. 9に近似（小礫多量）
9. 7.5YR5/4にぶい褐色土（小礫多量、やや堅）
10. 9に近似（やや明るい）
11. 7.5YR7/4にぶい黄褐色土（小礫中量、やや堅）
12. 5YR6/6橙色土（小礫多量　やや堅）
13. 10YR7/4にぶい黄褐色土（小礫多量）
14. 10YR7/6明黄褐色土（小礫多量）
15. 5YR6/8橙色土（小礫多量）
16. 7.5YR7/8黄褐色土
17. 2.5Y7/4浅黄色土（黄色土ブロック混）
18. 7.5YR7/4にぶい橙色土（礫多量、石材片含む）(流入土)
19. 2.5Y8/4淡黄色土（細礫少量、しまる）
20. 2.5YR6/6橙色土（黄色土、赤色土ブロック混）
21. 2.5YR7/8橙色土（灰色土ブロック混）
22. 2.5Y5/2暗灰黄色土（旧地表面）
23. 10YR5/6黄褐色土（よくしまる）(整地土)
24. 7.5YR5/4にぶい褐色土
25. 10YR5/2灰褐色土
26. 7.5YR8/2灰白色土
27. 10BG7/1明青灰色土（灰白色土混）
28. 37に近似
29. 10YR6/6橙色土
30. 2.5YR8/4橙色土
31. 2.5YR8/4淡黄色土
32. 5YR7/4にぶい橙色土（やや暗）
33. 5YR5/3にぶい赤褐色土（さらに暗い）
34. 10YR5/6黄褐色土（流入土）
35. 10YR6/4にぶい黄橙色土（流入土）
36. 46に近似
37. 7.5YR7/6橙色土
38. 5YR6/6橙色土
39. 7.5YR7/4にぶい橙色土（やや淡い）
40. 2.5Y8/4淡黄色土
41. 32に近似
42. 46に近似
43. 2.5YR6/6橙色土（灰色土混）
44. 42に近似（灰色土混）
45. 2.5YR7/4淡赤橙色土
46. 2.5YR6/8橙色土（褐灰色土混、しまる）
47. 10YR6/4にぶい黄橙色土
48. 2.5YR6/6橙色土
49. 10YR7/4にぶい黄橙色土
50. 46に近似の
51. 7.5YR7/3にぶい橙色土
52. 10YR7/4にぶい橙色土
53. 7.5YR6/4にぶい橙色土（小礫少量）

3～17　周溝埋土
19～22　盛土
24～27　流入土
28～33　裏込土
37～41　裏込土
42～47　盛土
48～53　２次堆積土



1. 表土
2. 7.5YR5/6にぶい橙色土
3. 5YR5/6明赤褐色土
4. 2.5Y8/4淡黄色土
5. 10YR8./3浅黄橙色土
6. 10YR7/6明黄褐色土
7. 10YR8/4浅黄橙色土
8. 5YR7/6橙色土
9. 7.5YR7/6橙色土
10. 10YR5/1褐灰色土
11. 2.5YR6/6橙色土
12. 2.5YR6/2灰黄色土
13. 11に近似
14. 10YR7/4にぶい黄橙色土
15. 5YR7/6橙色土
16. 13に近似
17. 15に近似（やや赤い）
18. 2.5Y8/3淡黄色土
19. 2.5YR7/4淡石橙色土
20. 7.5YR7/4にぶい橙色土
21. 20に近似（やや淡い）
22. 2.5YR6/4にぶい橙色土
23. 5YR7/4にぶい橙色土（やや暗）
24. 5YR5/3にぶい赤褐色土
25. 2.5YR7/8橙色土
26. 7.5YR7/6橙色土（灰色土、赤橙色土、浅黄色土混）
27. 2.5YR7/6橙色土（赤橙色土、黄橙色土混）
28. 5YR7/6橙色土（黄褐色土、赤橙色地山風化土混）
29. 2.5YR6/6橙色土（黄橙色土混）
30. 10YR7/6明黄褐色土（赤橙色土ブロック混）
31. 7.5YR5/4にぶい褐色土
32. 7.5YR7/4にぶい橙色土（赤橙、黄色土混）
33. 32に近似（橙色土ブロック混）
34. 2.5YR7/6橙色土（浅黄色土混）
35. 34に近似（赤橙色土ブロック混）
36. 35に近似
37. 35に近似（やや橙色）
38. 10YR8/4浅黄色土（橙色土混）
39. 38に近似（黄色土混）
40. 2.5Y7/4浅黄色（橙色土少量混）
41. 39に近似（黄色土ブロック混）
42. 40に近似（暗灰黄色ブロック混）
43. 2.5Y7/3浅黄色土（ブロック的に入る）
44. 39に近似
45. 42に近似（橙色土が明）
46. 34に近似（赤色土が明）
47. 10YR6/8赤橙色土（にぶい黄橙色土混）
48. 10YR7/6明黄褐色土
49. 7.5YR7/4にぶい黄橙色土
50. 49に近似（橙色土が明）
51. 48に近似
52. 10YR7/6明黄褐色（灰色土ブロック混）
53. 7.5YR7/4にぶい橙色土　（礫僅かで粘質土）
54. 53に近似（赤橙色土、橙色土、灰色土ブロック混）
55. 10YR7/6明黄褐色土
56. 2.5Y7/4浅黄色土
57. 56に近似（黄色が明）
58. 5YR7/6橙色土
59. 53に近似（やや暗）
60. 62に近似
61. 64に近似
62. 2.5Y7/4浅黄色土（赤色土ブロック混）
63. 62に近似（やや灰色）
64. 58に近似（やや明赤）
65. 2.5YR6/8橙色土（黄色土混）
66. 67に近似（灰白色土ブロック混、堅）
67. 10YR7/6明黄褐色土
68. 10R6/6赤橙色土（黄色土混）
69. 10YR7/6明黄褐色土
70. 7.5YR7/8黄橙色土（赤色土混）
71. 66に近似
72. 10YR7/6明黄褐色土（灰色土ブロック混）
73. 7.5YR7/6橙色土（赤色風化土混）
74. 7.5YR6/8橙色土
75. 10YR5/41にぶい黄褐色土（しまる）
76. 10YR6/6明黄褐色土（赤茶色土混）
77. 75YR7/6橙色土
78. 10YR7/6明黄褐色土
79. 10YR5/4にぶい黄褐色土
80. 10YR7/4にぶい黄橙色土
81. 10YR8/6黄橙色土
82. 5Y8/1灰白色土（橙色土混）
83. 7.5YR6/6橙色土（須恵器を包含する）
84. 2.5YR6/6橙色土
85. 7. 5YR6/8橙色土（灰白色土、明赤橙色土混）
86. 10YR6/4にぶい黄橙色土
87. 7.5YR5/6明褐色土
88. 2.5Y暗灰黄色土
89. 2.5YR6/6橙色土
90. 2.5Y7/4浅黄色土（明黄褐色粘質土混）
91. 2.5YR6/6橙色土（オリーブ黄色土、黄灰色土混）
92. 2.5YR5/6明石褐色土（灰色土、橙色土混入）

1～ 7　２次堆積土
8～11　盛土
12～24　裏込土
25～72　流入土
73～79　墓道流入土（Ⅲ）
82～87　墓道流入土（Ⅱ）
88～92　墓道流入土（Ⅰ）

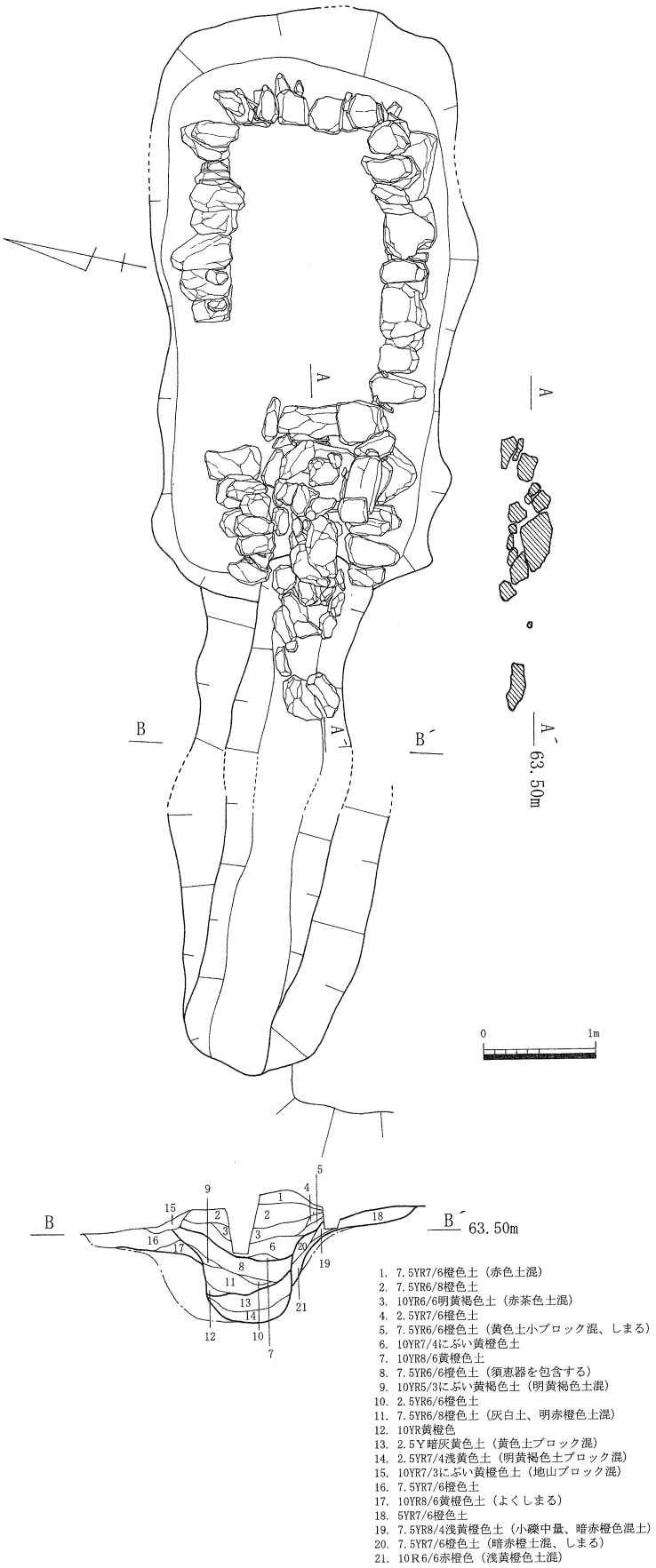
0　2m

第６図　墳丘断面図

残る上段は小型の石材ばかりで奥より2石までは2段で、3石目からは3段で積み上げ目地を通している。袖部については残る左側をみると、高さ約110cmを測る柱状の石材を立て据え、床面で側壁より約25cm石室内に張り出している。なお袖石の裏には30×30cmほどの平石が埋置されていた。抜き取られかけの右袖石は、痕跡から同じく石室内に20～30cmほど張り出すものとおもわれる。ともに玄門立柱で袖を構成していたことになる。羨道の基底石は大きさが不揃いだが3石分を数え、上には2～3段を残す。左側壁では玄室3段目とほぼ平行するように、4段目上面に目地がとおっている。玄室・羨道とも多少の歪みはあるが、側壁断面は緩やかに内傾して立ち上がる持ち送りの形態を呈するものとおもわれる。

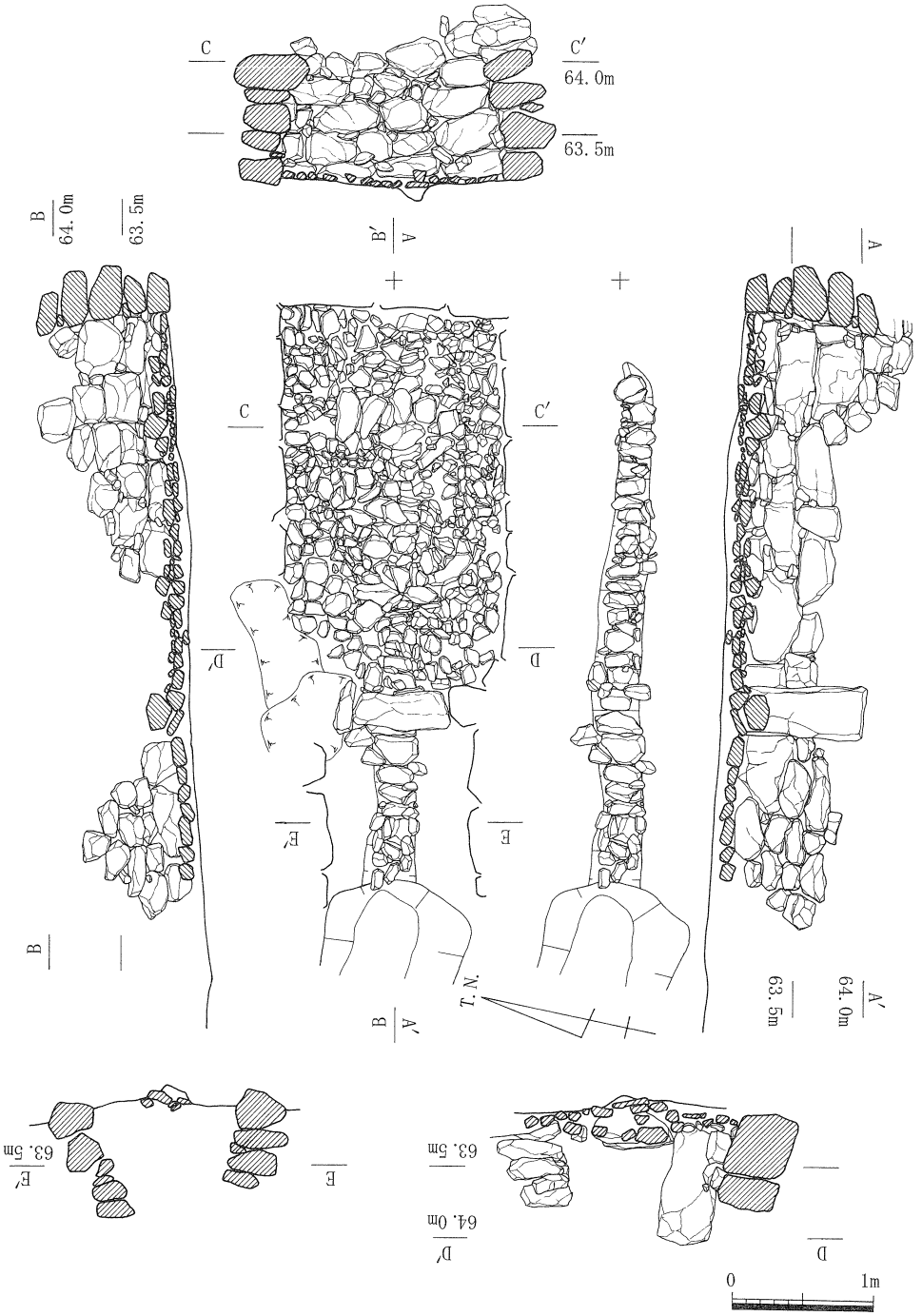
玄室の床面全体には拳大ほどの礫が敷き詰められていた。特定の位置によって顕著な差はみられないが、やや玄門寄りが大きいものである。礫床は二重になることはないが、玄室ほぼ中央の奥から0.7m・2mあたりに、長さ30cmほどの角礫からなるまとまりがある。両袖石間の玄門部には長さ約70cm・幅約25cm・厚さ約20cmを測る、長方形の仕切石が配されていた。さらに右袖石との隙間を埋めるため長さ約35cm・幅約10cmの平石を立て置く。

玄室礫床を除去すると排水溝が検出された。排水溝は墓壙底地山を掘り込んだもので、玄室



第７図　石室及び墓道平面図

礫床を除去すると排水溝が検出された。排水溝は墓壙底地山を掘り込んだもので、玄室のほぼ中央の奥壁から約40cmあけて始まる。玄室からの排水溝はそのまま直線的に羨道をとおり、墓道に取り付くものである。排水溝の幅は約20～30cm・深さ約10cmで、断面逆台形状を呈している。玄室から羨門部にかけて緩やかな傾斜をもつ。排水溝の上面は平石でもって蓋をし、小礫で隙間を詰める。なお蓋石は仕切石の下にも配架されている。石室の規模は床面での計測値で玄室長2.67m、奥壁幅1.55m・玄門での玄室幅約1.35mを測る。羨道は長さ1.50m、玄門幅約0.78m、玄門付近・石室入口での幅1.05m・1.07mを測る。玄室と羨道をあわせた全長は4.17m、残存する最大



第８図　５号墳石室床面平・立面図

高は左側壁奥で約1.2mである。

石室墓壙掘方はおおむね暗灰色土上面から掘り込まれ、隅丸の長方形であるが入口付近が多少狭くなっている。その深さは暗灰色土の傾斜に沿って石室開口部ほど浅くなるが、掘り込みの傾斜角度に大きな差はみられず、直角に近いものである。奥壁部での深さ約1m・北西隅付近で約0.65m、上面での最大幅は約2.9mを測る。掘方と石室石材との間の埋土は、石材3～4段分は橙色土や赤色土との互層で層厚がある。

4. 墓道

墓道は石室入口から石室外へは約4.7mのところまで確認できた。主軸が石室主軸からやや北に振っており、だいたいN-87°-Eである。墓道西端からその南側斜面にかけては、地山を削り出し面が外開きに2mほど延びている。墓道の掘り込み面は南側が地山からであるが、北側は地山整形土から掘り込んでおり最大で幅1.5mを測る。断面形は「U字形状」を呈し、底面からほぼ垂直に立ち上がったあと、大きく外開きとなる。横断面土層では追葬時掘り直しの切り合いは見られない。ただ、石室入口付近の埋土は地山土の赤橙色土をはさみながら、堅質な灰色土混じりの横色土などがそれぞれ重積しており、床面とおもわれる。遺物は須恵器片が第6図83・85層に集中して出土している。

5. 遺物出土状況

遺物は石室内から須恵器・鉄器・耳環・玉類などが出土している。天井石がすでに無く、右袖石周りを中心に数回の石材の抜き取りが見られる。ただ、礫床上の土層は水平堆積であり、遺物は大きく擾乱されておらず、床面の状況はおおむね最終埋葬当時を留めるものとおもわれる。

土器についてみてみると、個体を識別できたすべてが須恵器蓋杯である。玄室奥壁際中央ほどにと玄室半ばやや奥壁寄り右半とに個体がまとまってみられた。前者には蓋杯5個体があり礫床に直上する。このうちの4個体は5・6をセットにして一番下に置き、7・8は逆にして8が上になるように重ねられていた。後者ではセット1組を含む4個体が間をとってみられる。ほか、袖石前に杯身が1個体離れてある。羨道部では玄門際左側壁寄りにセット1組を含む3個体がある。層位的にみるとセット3・4は排水溝を覆う灰色土直上にあるが、14はこれより一層はさんであり追葬時の床面上となる。

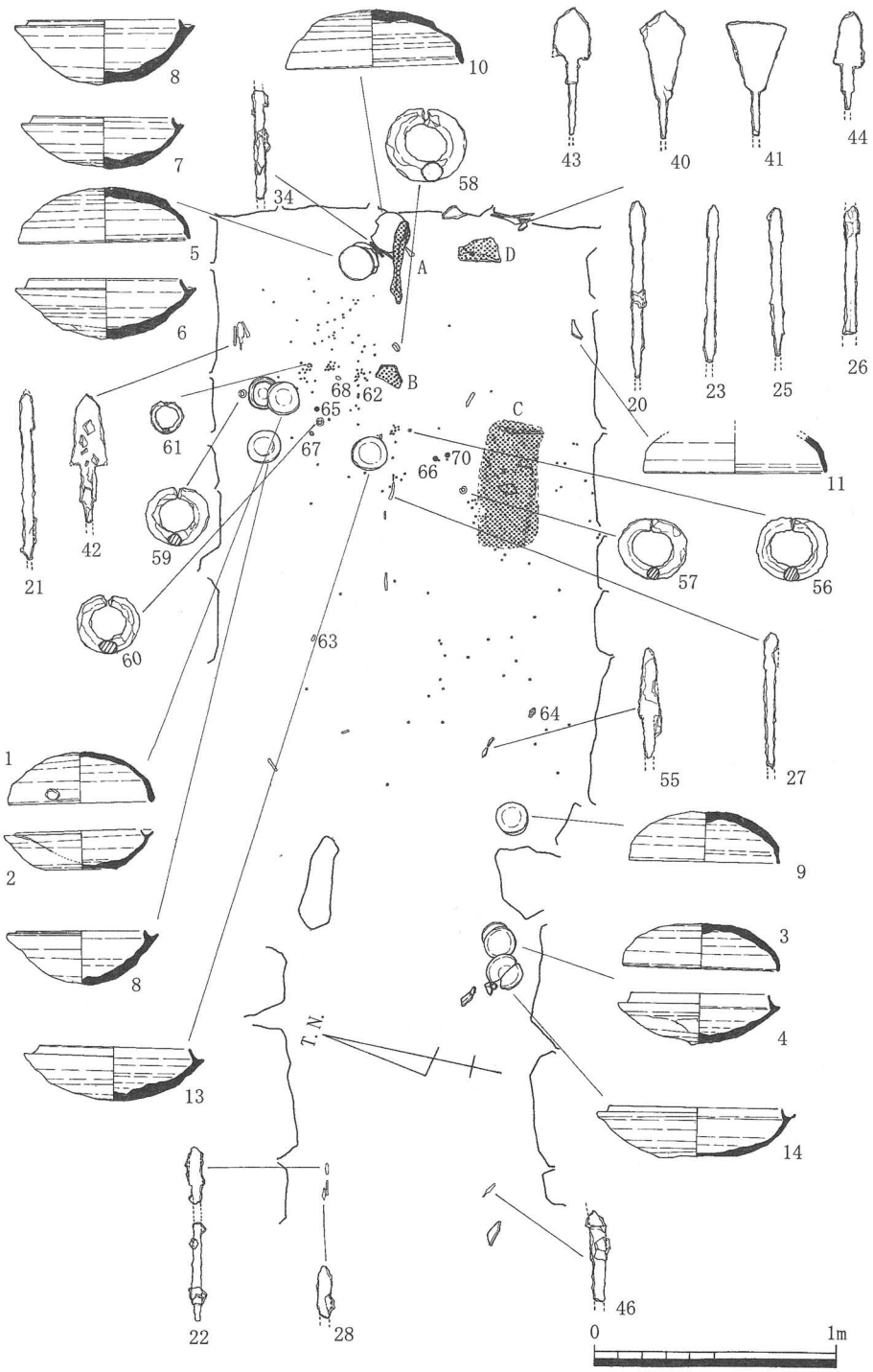
鉄器についてであるが、須恵器とほぼ同様なあり方を示している。玄室奥壁際左寄りに広根系鏃4点、尖根系鏃4点がまとまってある。また、右側壁際奥壁寄りに数点のまとまりがあり、その他は散らばった状況である。羨道部では開口部際にあり、右側壁寄りにある尖根系鏃22・28は灰色土直上である。

耳環は計6点出土しており、その法量や多少遊離はしていようが30cmほどの間がある出土位置からすると56と57、59と60が対をなして装着されていたものと考えられる。58と61については質的な差異はあるが、対をなしていた可能性が高いと考える。玉類については比較的集中する箇所が、玄室奥寄り右半と須恵器13周辺および耳環57周辺にみられる。また、左袖石の前面にはやや散らばってはいるがまとまりを捉えることができよう。これのうち前二者はガラス小玉が、後のものは土製練玉が多数を占めるものである。

人骨については脛骨（第9図A）・頭骨（B）・顎骨（C）・骨盤（D）などが確認される。脛骨・骨盤は奥壁寄りにあり脛骨は杯蓋10の上に位置する。頭骨は礫床上に配置された石の間隙に落ち込んでいた。また、顎骨は歯牙数本が残った状態にあり、上腕骨とおもわれる骨や

遊離した歯牙などとともに、礫床上の堆積土上面にて検出された。

棺痕跡や棺釘といった埋葬位置を明示するものは認められなかった。各遺物の出土位置やそのまとまり、また人骨C－D間のような遺物の検出されない空間などは相互につながりあって、追葬を含む複数回の埋葬過程をうかがえるものとおもわれる。これらの状況や礫床上の石の配置などから想定される棺配置は奥壁寄り右半、左半の玄室中ほどから袖石前面にかけて、玄室ほぼ中央の3ヶ所が考えられる。



第９図　石室内遺物出土状況図

6.　出土遺物

（1）土器

5号墳からは須恵器と僅かながらの土師器小片が出土している。これらは石室を主とするが墓道・周溝からの出土もみられる。

須恵器

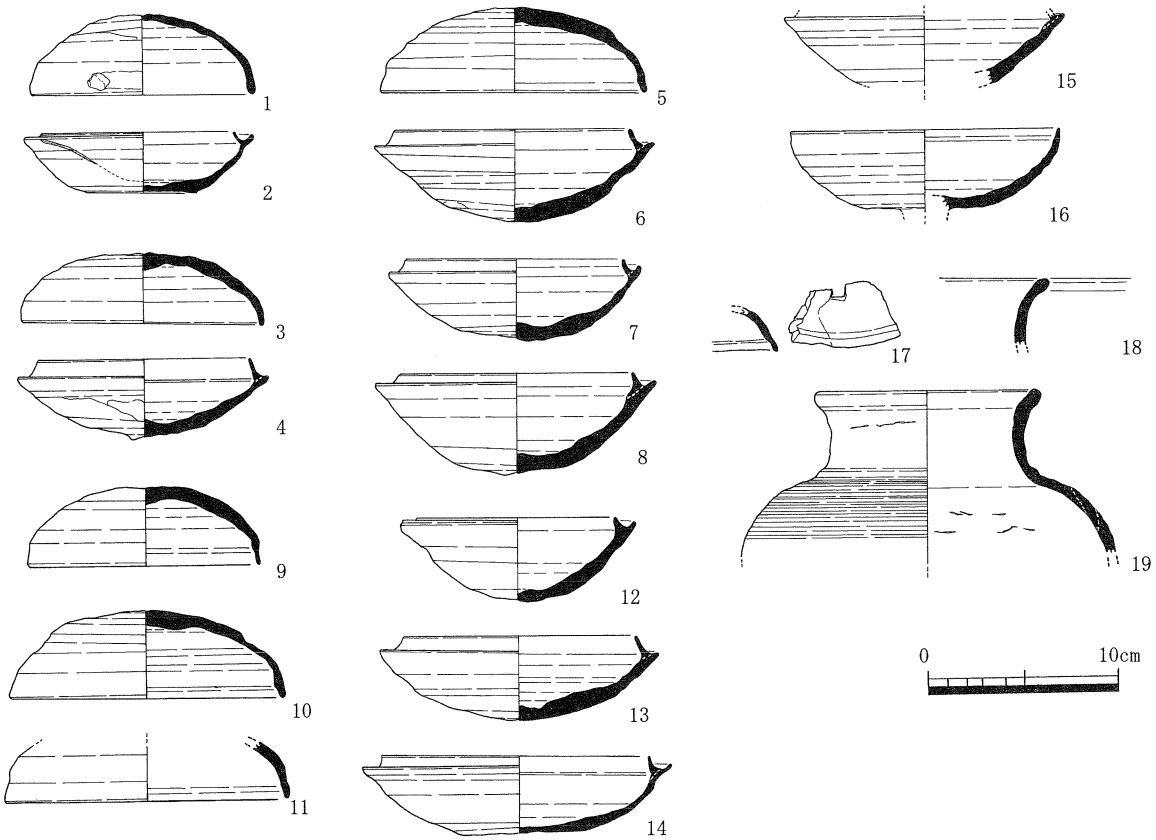
1～14が石室出土のもので図化したすべてが蓋杯である。

蓋杯

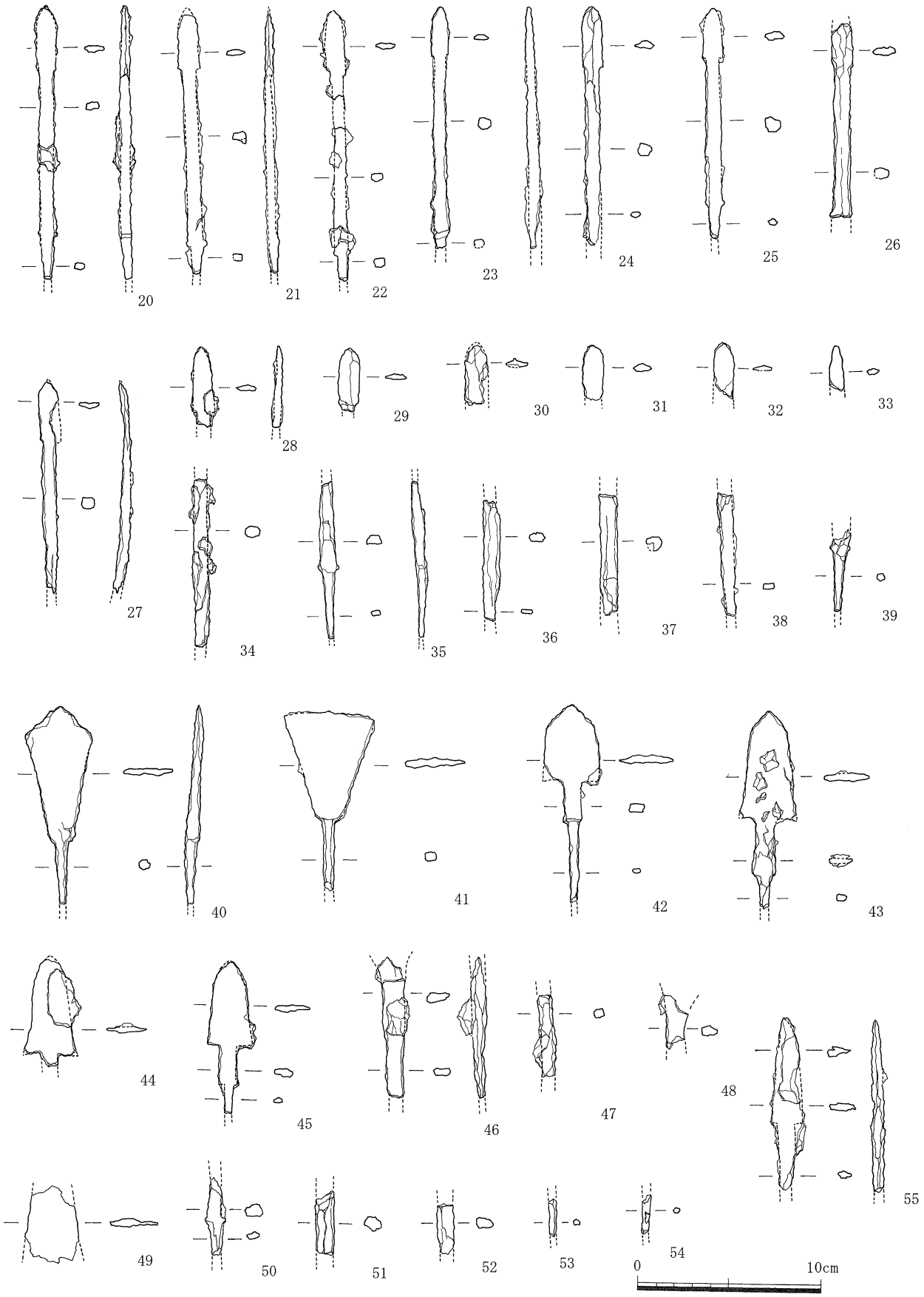
蓋杯のうち杯蓋は6点を数える。1・9は口径が12cm前後、器高が4cmほどを測り口径に対して器

高が高いものである。天井は比較的丸みをもち、口縁部はやや垂下気味である。端部は丸くおさめている。天井部外面には反時計回りの回転ヘラケズリを施すが、やや粗雑で範囲も小さい。1は口縁部外面には横方向に自然釉のたれが流れている。3は口径が12.6cm、器高3.7cmを測り、天井は比較的低く丸みをもち、口縁部へはなだらかに湾曲する。口縁端部は丸くおさめている。天井部外面には反時計回りの回転ヘラケズリを半分ほど施す。5・10・11は口径が14cmをこえ、器高は4.5～4.7cmをはかり、1・9などと比べ一回り大きいものである。完存する5・10の天井は比較的緩やかで高く、口縁部にはなだらかに下る。天井外面には回転ヘラケズリを時計回りに施し、口縁端部はナデ調整によって段状を呈する。15の口縁端部は丸くおさめている。

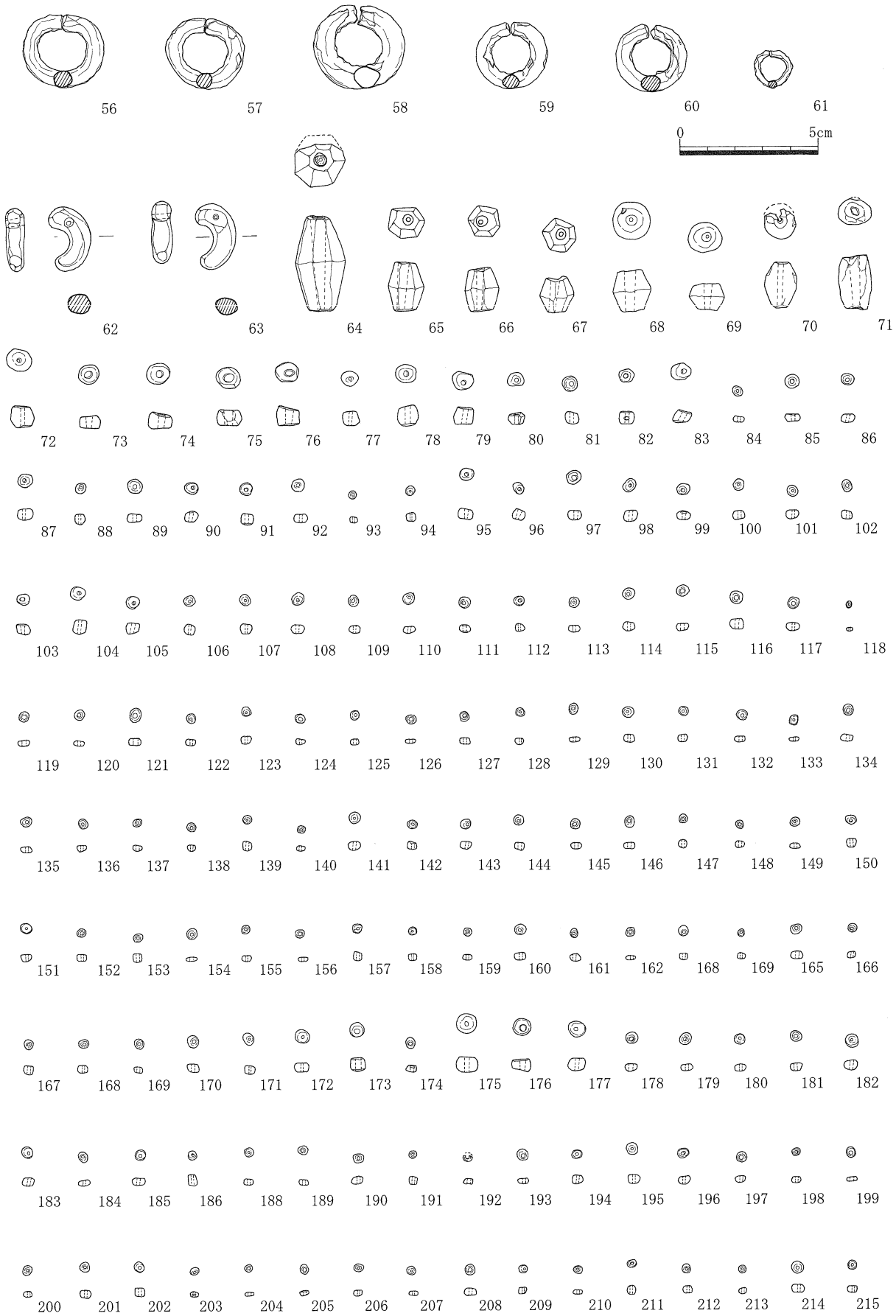
杯身は9点あり、2・12は口径が10cm台のものである。底部は2が半截台形状を呈し、12は切り離し後の未調整範囲が残る。口縁部は内傾気味に立ち上がるが短く、外上方にのびる受部の長さとほぼ等しくなっている。2の底部外面には別個体の融着痕がみとめられる。4・7は口径が11.3～11.6cmで、器高が約4.0cmを測る。底部外面の半分ほどに回転ヘラケズリを施す。口縁部は4が直線的に内傾して立ち上がるが、7はやや短く内彎する。受部はだいたい水平方向に小さく突き出し、丸くおさめる。6・13は口径が約12.5cm、器高が4.5～4.9cmを測る大きいもので、底部はやや丸みをもつが、13がより低く緩やかとなっている。外面の2/3ちかくに回転ヘラケズリを施す。口縁部は比較的長く内傾して立ち上がるが、6は弱く湾曲し13は直線的である。8の口径は6・13とほぼ同じであるが器高が5.2cmとやや深くなっている。底部外面の回転ヘラケズリは範囲を狭めている。口縁部先端は外上方にのびる受部を結んだ線より、僅かながら上位になる。14は口径が14cmをこえるが、器高が4.2cmと浅いものである。特徴は2と近似し底部は半截台形状で、外面



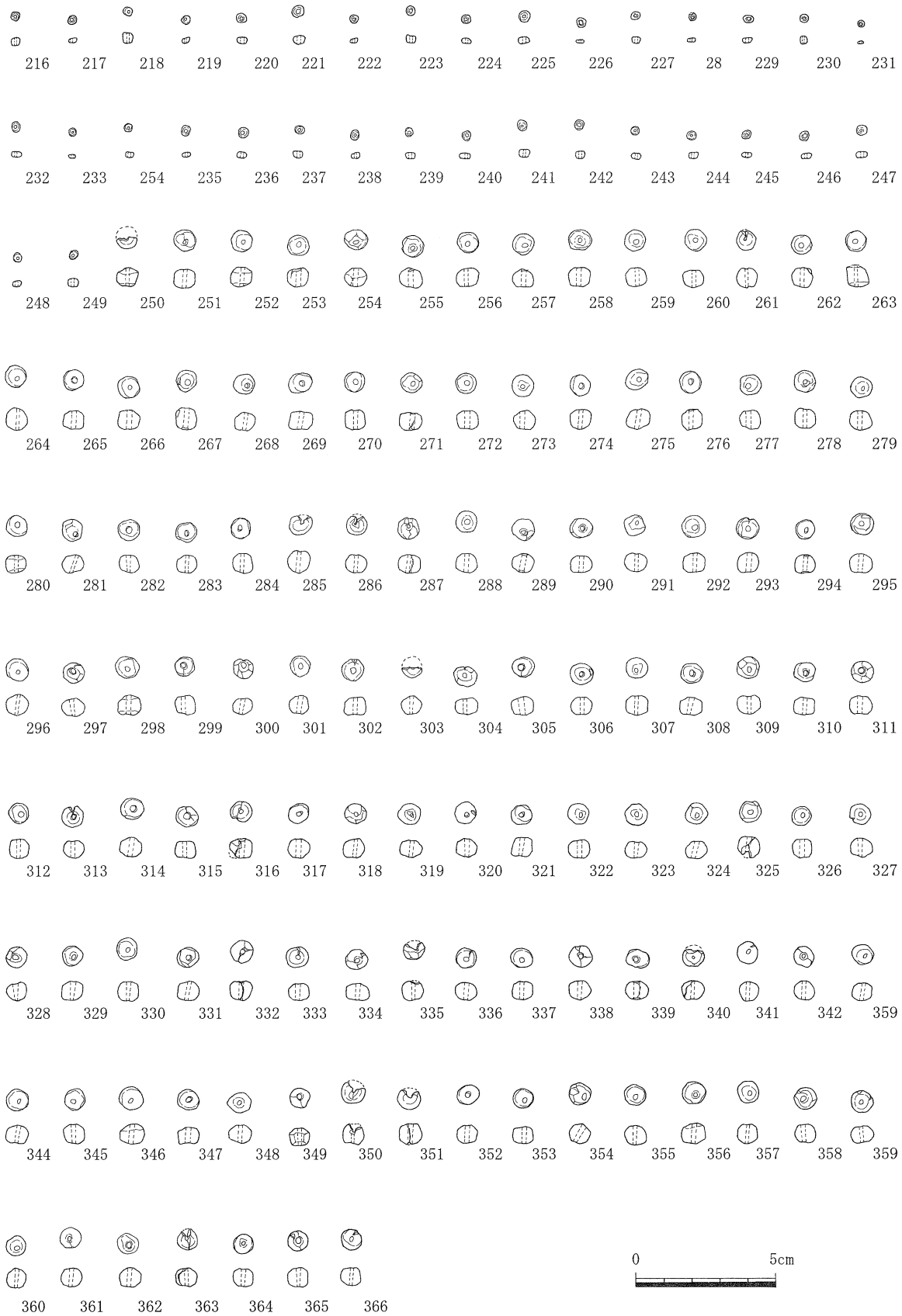
第10図　出土遺物実測図（1）



第11図　出土遺物実測図（2）



第12図　出土遺物実測図（3）



第13回　出土遺物実測図(4)

の半分ほどに回転ヘラケズリがおよぶ。口縁部は短く上方に立ち上がり、受け部は外上方へ小さく内彎する。15は墓道出土のもので口縁部と底部を欠く。受部径で約15cmを測り、6と同様の形態とおもわれる。1・2、3・4、5・6はセットで出土している。

高杯

16・17は墓道出土である。16はその大半を欠くが、椀状の杯部に長い脚柱部がつくものとおもわれる。杯部は口径に比してやや浅い底部をもつ。外面には回転ヘラケズリを施し、口縁部はやや上方に内彎する。17は脚端部片でやや歪んではいるが、上方にかけて内彎している。端部内面はナデにより段状を呈し、先端はそのまま下り丸く収まる。長方形透かしをうがっている。

壺

18・19は周溝からの出土である。口頸部はともに短くさほど外反せず、頸部から直立し外上方に小さく屈曲して端部につづく。19は頸部と体部の境が段状になり、外面にはカキメが認められる。

（2）鉄器

鉄鏃

鉄鏃は玄室・羨道出土のものをあわせて鏃身部を数えると21点ある。20～39は尖根系の鉄鏃である。このうち鏃身部が残る20～33についてみるとすべて長頸柳葉式で、鏃身関部は直角もしくは鈍角をなし篦被は棘状を有するものである。40～45は平根系の鉄鏃で、40は圭頭式で関部から峰にかけてやや内彎する。41は方頭式で鏃身がやや短いものである。42～45は三角形式のもので、42は五角形を呈するものである。43～45は長三角形式のもので、43・44は関部がやや鋭角で逆刺をもつものである。45は関部が直角のものである。34～39・46～54はそれぞれの頸部破片である。

刀子

55は刃部および茎部の一部を欠く小振りの刀子である。現存長は9.1cm、刀身部は長さ5.5cm・幅1.4cm・厚さ0.4cmである。

（3）装身具

耳環

玄室礫床面より2対4点を含む計6点の耳環が出土している。対をなす56・57は外径が約2.6～2.9cm・断面径約0.6cmを測る。断面形は円形を呈している。また59・60はわずかに小さく、外径が約2.3～2.6cm・断面径約0.5～0.7cmを測り、断面形は楕円形である。4点とも全体に緑青をふくが、銅芯銀張とおもわれる。58は外径約3～3.3cm・断面径約0.9cmを測る中空ものである。半分ほどに緑青がふいており、表面は銀が確認される。61は外径約1.3cm・断面径約0.2cmを測る小型細環で、外面は酸化し黒褐色を呈する。

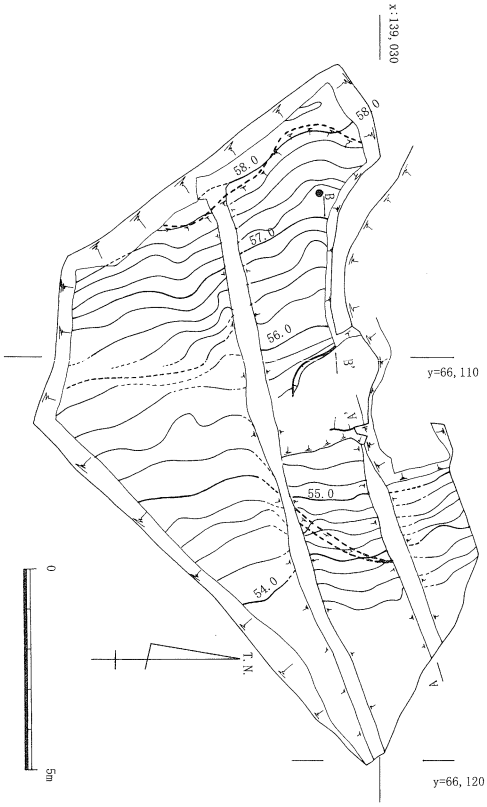
玉類

玄室から出土した玉類は勾玉2点・切子玉4点・算盤玉2点・棗玉2点のほか、小玉が295点となっている。勾玉62はにぶい橙色の瑪瑙製で、長さ23mm・幅8mmを測る。63は滑石製で灰白色を呈する。長さ24mm・幅7mmを測る。切子玉はすべて水晶製で、64は長さ34mmと他より大きいものである。算盤玉68・69はともに水晶製である。棗玉70は琥珀製で外面はややくすんだ橙色である。71は土製で多少欠けている。小玉にはガラス製と土製のものがみられる。ガラス製72～249は形状や大きさ・色調などが様々であるが、比較的大きめのものは紺色を呈する。土製250～366は黒または黒褐色を呈する練玉である。

第４章　　６号墳の調査結果

1.　調査前の状況

6号墳が所在する地点は丘陵東斜面のちょうど裾部にあたり、5号墳から直線で約20m・比高差は約9mを測る。山裾ラインが微少な谷地形状に入りくんだ前面北岸に立地する。この6号墳はすでに土取によって北側から大きくえぐられ損壊し、石室石積みの横断面を露出させていた。また、周囲の地形も開墾や小径による啓開などで大きく改変を受けていた。このような状況のため、墳丘についてはその東側斜面にてかろうじて残存していることが想定されるのみであった。

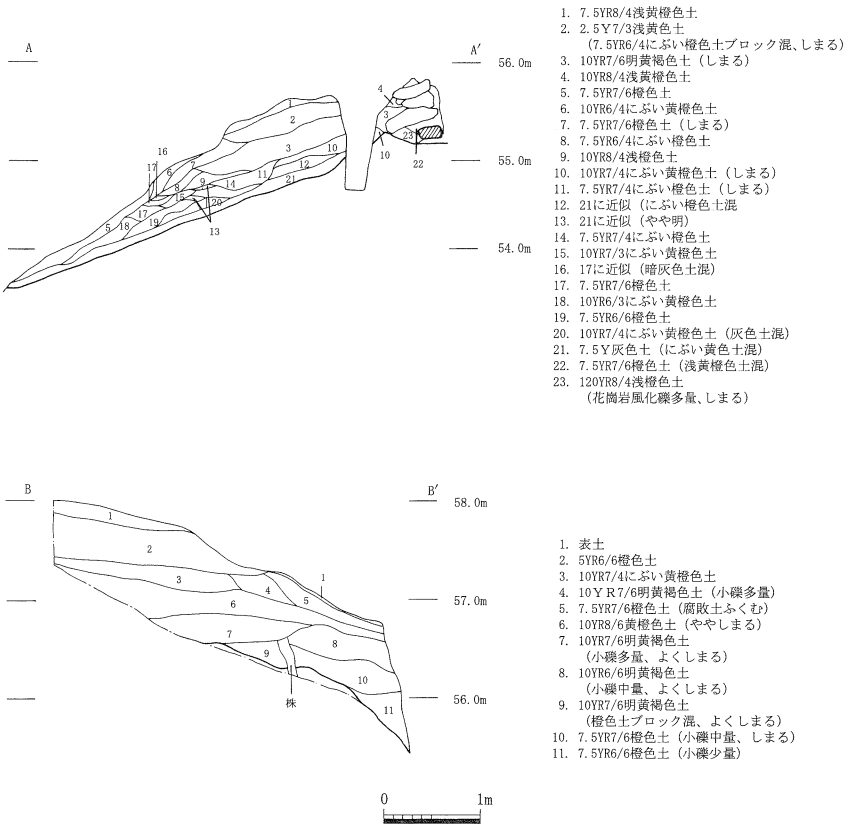


第14図　６号墳調査後地形測量図

2.　墳丘

墳丘は上方西側から南側にかけての流出が著しく確実性に乏しい。また、西側の丘陵斜面において、周溝や削り出しなどが想定されたが確認されなかった。他方、東側斜面では盛土が残り、墳端は約53.95mにあたる。このラインは南東側がややくずれをみせるが、立地や石室規模などとあわせ考えると直径では約6m程度の円墳が推定される。玄室床面と東側墳端との比高差は約1.3mである。

墓壙は平面形がコの字状を呈し、最大幅2.0mほどで地山もしくは旧地表面を掘り込んでいる。地形上西側ほど深く、南側石室前面から東側にかけて浅くなっている。盛土は東側斜面断面でみると、地山上には層厚20



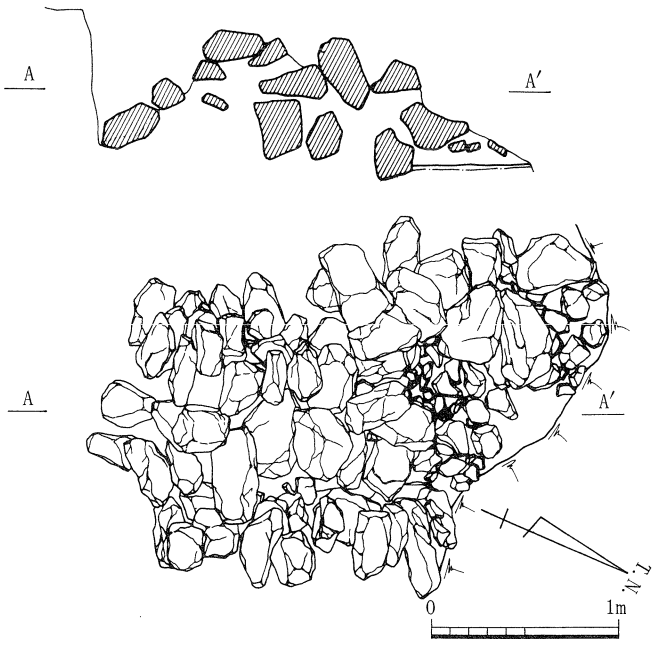
第15図　墳丘断面図

cmほどの暗灰色土層が傾斜に沿って形成されており、旧地表面と考えられる。墓壙内の基底石の裏込めをおこない、2段目から旧地表面上に壁体支持のものが内側に盛られさらに墳端までの盛土がなされている。側壁基底石より上2段相当の約40cmの盛土が残存している。

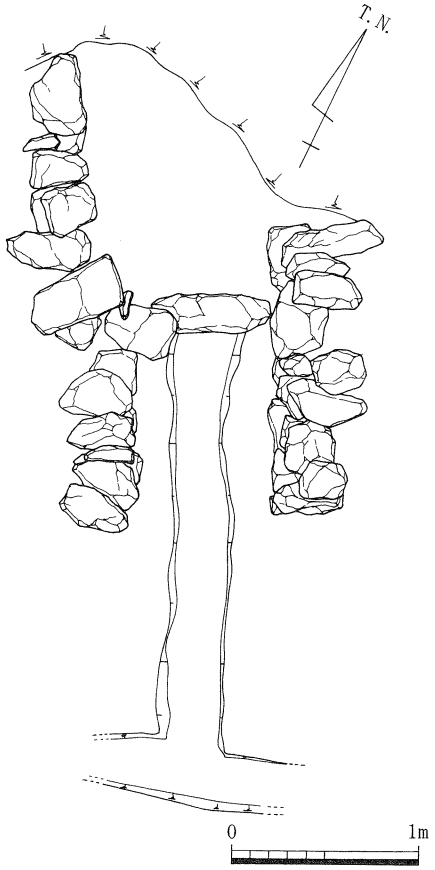
3. 埋葬施設

6号墳の埋葬施設は右片袖を有する横穴式石室で、斜面等高線に平行するように立地している。石室主軸方向はN-27°-Wを示し、南東側が開口する。すでに露出していたのは玄室で、奥壁及び側壁の幾分かが消失していることになる。検出時に天井石はすでになく、壁体石材も土圧などによって石室内または東側斜面に転落していた。また、転落した以外にも抜き取りなどによって失われていることが考えられた。なお、実測時に取り外さなかった石材も、多少のずれがあるものと考えられる。

壁体の構築に用いられた石材は花崗岩質の角礫で、長さ30cm・幅20cm前後の小型のものがほとんどである。基底石については大差ないが、やや大きいものがみられる。石材は小口積みのものが多くみられる。玄室では右側壁をよく残す。基底石より上2段を検出したが、3段目はほとんどずれ落ちていた。左側壁は1列のみで4段あり、高さ約60cmを残す。袖の部分は高さ約50cmを測る石材を、玄室側壁にそって積み上げた列の内側に重ねたて置



第16図　石室検出時状況平断面図

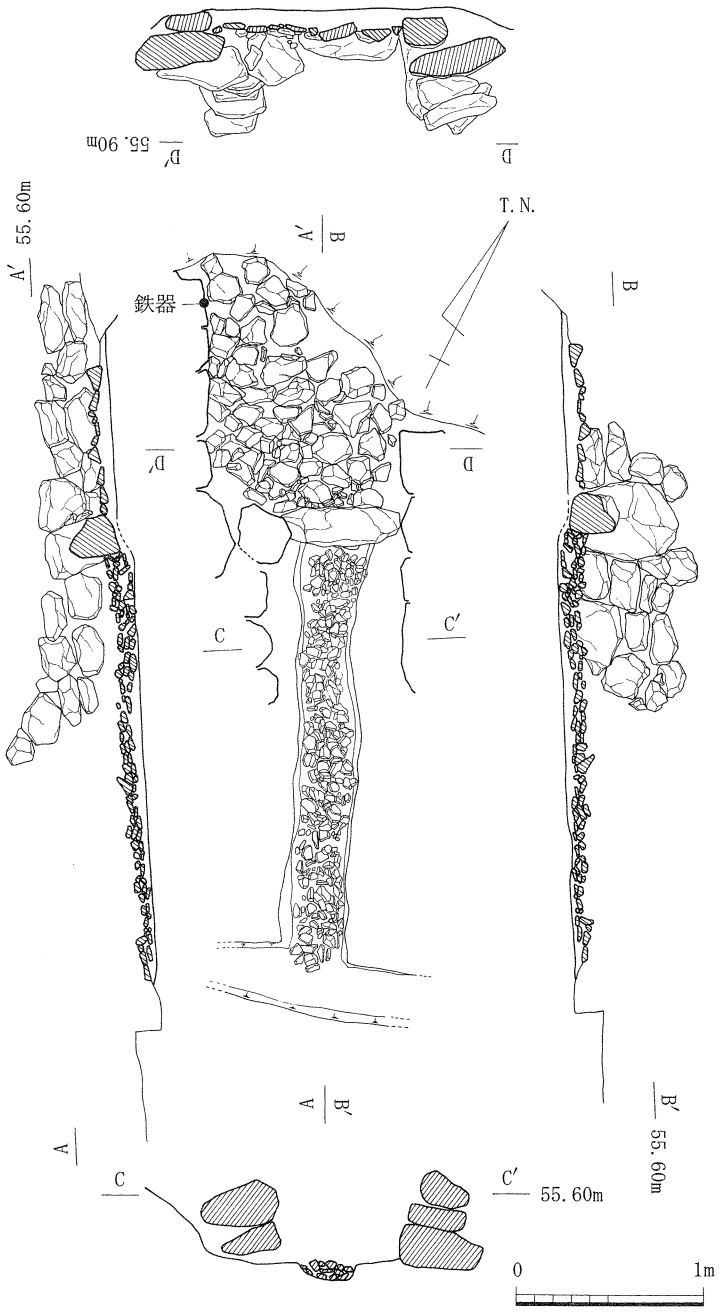


第17図　石室精査後平面図

く。ただ、裏側の側壁が動いたことによって、袖石も石室内に押され傾いている。左側壁にも同様な石材が縦位に据えられており、玄門立柱を構成している。羨道は右側壁が3石、左側壁が2石である。右側壁では3・4段目の石材のほとんどが動いていたためはずしたが、検出時は60cmほどの高さを測った。

玄室の床面には主に20cm前後の礫を、残るほぼ全面に敷設している。礫は雑然と配されており、中ほど大きく、小さい礫を詰めているようである。また、棺床となるような上位の配石はみられなかった。玄門部には長さ60cm・幅20cm・高さ25cmを測る、細柱状の石材を仕切石として配置している。羨道の床面には排水溝が掘り込まれている。仕切石の下からはじまり、石室中心をとおり羨道入口を過ぎさらにつづいている。長さ約2.3m上面での幅30～35cm・深さ15～25cm・を測り、断面形はゆるい逆台形状を呈する。溝底には小礫が充填され、暗灰色土が埋土として入り暗渠の構造となる。

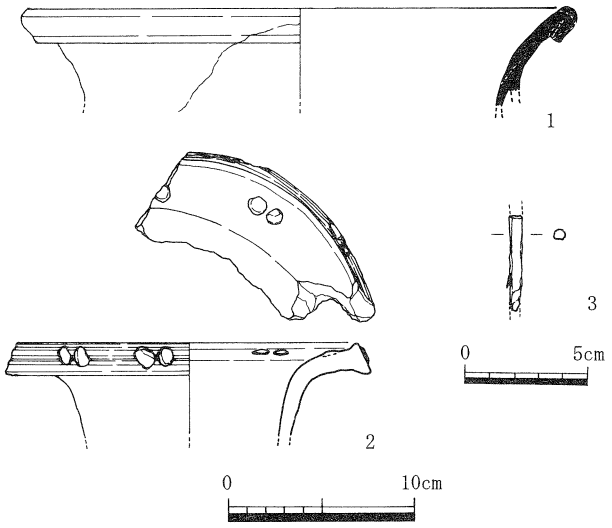
羨道部にて検出時に崩落していた側壁石材を除くと、やや大きい塊石が数個あり閉塞にはこれらを使用したことが考えられる。石室の規模は床面での計測値で玄室残存長1.3m、玄室幅玄門側で1.08mを測り、長方形を呈する。羨道は長さ1.0m、玄門付近・石室入口での幅0.7m・0.68mを測る。



第18図　石室床面平・立面図

4. 出土遺物

6号墳の調査で出土した遺物は数点とごく僅かである。まず玄室内より出土したのは鉄器（3）のみである。左側壁際礫床の隙間に位置するもので、鉄鏃茎部片とおもわれる。ほか2点の須恵器と弥生土器は、丘陵斜面の流出土掘り下げ時に出土したものである。（1）は甕口縁部で、西側斜面の地山直上流出土より出土しており、5号墳から転落したものであろう。端部は玉縁状に折り返している。（2）は弥生土器の壺で、墳丘南東側の流出土内より出土した。頸部は外開きに立ち上がり、口縁部にかけて水平近くに短く屈曲する。端部は上下に拡張し3条の凹線文を施している。端部外面と口縁部内面に2個並べた円形浮文を貼り付けている。弥生時代中期後半頃とおもわれる。



第19図　出土遺物実測図

第５章　　まとめ

蓑神古墳群・東支群は、洪積台地に八つ手状に突き出した丘陵の一つに所在する。すでに破壊されたものが幾つかありおそらく、10基前後を数える群集墳であったと考えられる。5・6号墳以外はその具体的内容が明らかではないため、今回の調査成果とおして当該地周辺の状況についてふれることとする。

1.　古墳の築造と追葬時期

5号墳・6号墳ともに既掘を被っていたが、5号墳では一定量の土器が出土している。ここでは出土した須恵器のなかで量的にあり、変化を追いやすい蓋杯類について検討をおこない、古墳の築造された時期や追葬の状況をみることとする。

図示した石室内出土蓋杯はすべて椀型の蓋に立ち上がりをもった身からなり、それぞれの法量や特徴から3つに分類することができる。

Ⅰ類　　口径は蓋で14cm以上、身では約12.5cm、器高が4.5～4.9cmの間にある。蓋はやや丸みをもった天井部外面には回転ヘラケズリを時計回りに施す。口縁部はやや斜め気味に下り、端部はナデによって段状を呈する。身の口縁部は内傾するがつよく立ち上がる。受部はやや水平気味にのび端部は丸い。底部外面の1/2以上に回転ヘラケズリを施す。セットである5・6と10および13が相当する。

Ⅱ類　　蓋・身ともに法量にばらつきがある。蓋は口径が12cm後半台と15cmになろうとするものがあり、器高はⅠ類より低くなる。口縁部から天井部にかけては丸みをおび、縁端部は丸くおさめている。身は口径が11～12cmのものと14cmをこえるもので、口縁部の立ち上がりは短く低くなり、受部は外上方に突き出る。3・4と7・8・11・14が相当する。

Ⅲ類　　Ⅱ類よりさらに小型になる。蓋は口径が11.7～12.2cm、身では10.2～10.5cmとなる。蓋は器高が4cmほどを測り、口径に対して器高が高い。身の口縁部はさらに短く内傾して立ち上がるが、外上方にのびる受部の長さとほぼ等しい。ヘラ切り後の調整はかなり粗雑となっている。1・2と9・12が相当する。これまでの須恵器編年研究からみて、Ⅰ類からⅢ類へ変化していくことが是認される。これを陶邑田辺編年と対比させるなら、およそⅠ類がＴＫ43型式に、Ⅱ類がＴＫ209型式に、Ⅲ類はＴＫ217型式古相にほぼ相当するものと考えられる。(1)

次に遺物の出土状況から埋葬位置を復原し、上記の須恵器分類を用い埋葬順序や時期についてみてみる。そこで、遺物の出土状況や時期などから被葬者の埋葬過程を考えることとする。なお、人骨のいくつかについては鑑定結果を得ており、この知見をあわせ考えることとする。玄室内に何体埋葬されたかであるが、直接証拠となる人骨は鑑定より骨Ｃのまとまりにおいて、若年者と高齢者の歯牙が同定されることから、最低でも2体分の存在が考えられる。

先ず、人骨の出土状況をみると、人骨Ｂの頭蓋骨は礫床上に並んである、石列にともなうものと考えられる。石列は西側がやや不規則となっているが、棺台として配置されたものとおもわれ、ここに一体分の埋葬を想定し、大きさは長さ約160cm・幅約70cmぐらいのもと考える。玄室左半中ほどにある人骨Ｃには2体分の遺存体が残る。このうち鑑定試料である歯牙は、顎骨に残っていたものが老齢者で、すでに遊離していたものが若年者である。この周りから左袖石の範囲には土製練玉の分布が見られ、少なくとも一体分の埋葬位置と考える。なお、人骨Ａ・Ｄは同一遺体のものである可能性が高いが、杯蓋の上に脛骨がのっているような状況からして、2次的な移動によるものとおもわれる。また、ここからは若年者の歯牙が出土している。この他、須恵器5～8

や鉄鏃21・43の間にみられるガラス小玉のまとまりを含む範囲に、一体分の埋葬を考える。

このように右半奥壁寄り、左半の玄室中ほどから袖石前面にかけてと玄室ほぼ中央の3ヶ所において埋葬位置が想定され、それぞれ前者から埋葬Ⅰ・埋葬Ⅱ・埋葬Ⅲとする。埋葬Ⅰと埋葬Ⅲとでは埋葬Ⅰの上位に重複して、埋葬Ⅲが配置されていることから埋葬Ⅰが先行するものであろう。埋葬Ⅰにともなう遺物は奥壁際にある、須恵器5～8・10や鉄鏃21・23および耳環59・60である。須恵器5～8は重ね積まれたものでこれを一括とすれば、ＴＫ209型式段階での埋葬とおもわれる。埋葬Ⅲには須恵器1・2・12や耳環58・61がともない、ＴＫ217型式古相と考えられる。人骨Ａ・Ｄは埋葬Ⅲに際しての埋葬Ⅰの「片付け」によるもので、人骨Ｃに歯牙２体分がともなうのはこれによるものと考える。奥壁際に集積する鉄鏃もこれに付随する可能性が考えられる。埋葬Ⅱは位置関係からは断定できないが、上記の「片付け」が空間確保とするなら、すでに所在していたと推測され、奥壁から離してあることは追葬を考慮したものともおもわれる。耳環56・57、須恵器9などがともない、ＴＫ217型式古相と考えられる。

以上から5号墳には3体が埋葬されたもので、出土した耳環の数6点ともうまく合致する。埋葬Ⅰが初葬として6世紀末から7世紀初めにおこなわれ、次いで埋葬Ⅱが1回目の追葬として7世紀前半に葬られる。埋葬Ⅲは片付けをともなう2回目の追葬で、埋葬Ⅱとの時間差はさほど無かったものと考えられる。結果、7世紀第Ⅱ四半期を下らない頃までに最終埋葬となったものである。

6号墳については今回の調査において、時期比定に足りうる遺物の出土をみない。このため、5号墳と同じように須恵器から判断することはできない。

2. 石室について

調査地を含む長尾平野周辺（旧長尾町・寒川町・大川町）において、現状で横穴式石室が確認されるのはＴＫ-43型式期からである。(2)　前段階での横穴式石室導入の様相は不明で、ＴＫ-43型式期に普及をみた後ＴＫ４-217型式期まで築造される。新規の築造が停止後も追葬は一部でＴＫ-48型式期までおこなわれている。古墳はおおむね2～4基で群をなしているが、10基以上で群集墳を構成するものもある。

5号墳横穴式石室の構造を記すと、両袖式で袖石は羨道より内に張り出す。袖石には立柱石を据え、床面には仕切石を配する。壁体には腰石は用いず、閉塞には塊石を使用する。玄室床面には礫を敷設し、墓壙底には排水溝を設置するといった点があげられる。また、6号墳は右片袖式で袖石には立柱石を据え、床面には仕切石を配する。玄室床面には礫を敷設し、羨道床面には排水溝を設置する、などがあげられる。次に規模について玄室床面積をもとに、便宜的に１～4類に分けることとする。１類は10㎡をこえるもので中尾古墳のみである。2類は5～10㎡未満のもので蓑神塚古墳・大石北谷古墳・椋の木古墳などである。3類は3～5㎡未満のもので、蓑神5号墳をはじめ大末3号墳・奥12号墳などである。4類は3㎡未満のもので陰浦1号・2号墳があり、蓑神6号墳も該当すると考えられる。5号墳は國木健司氏の分類でＢ-1類にあたり、調査地周辺で多数を占めるもので、その規模も一般的な大きさといえる。6号墳はＢ-2類で、右片袖式は緑ケ丘2号墳・尾崎西遺跡ＳＴ-162・奥15号墳だけに限られ、規模は最小のものである。(3)

ほかに特徴として排水溝の設置があげられる。ともに石室中央において直線的に地山を掘削し、延伸するものである。ただ、その構造は5号墳が玄室半ばから始まり蓋石を架けるのに対し、6号墳では仕切石から羨道をとおって墳丘外に延び、蓋石は架けずに溝内に小礫を詰めこむものである。排水溝自体は石室の構築・保持のための、本来的な目的を有するものであろうが、構造の違いがどの程度排水能力に影響するかのは不明である。両者の違いについてはおおむね石室の規模

表１　さぬき市内（長尾平野周辺）主要古墳一覧

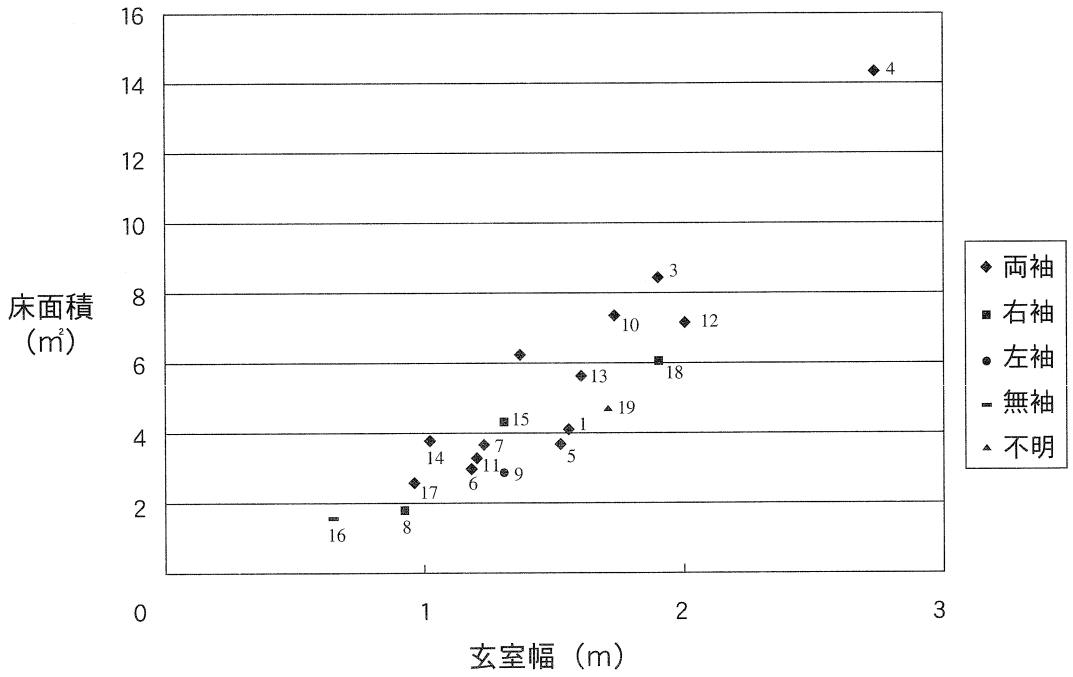
番号	名称	所在地	立地	墳丘規模(m)	開口方向	石室全長(m)	玄室長(m)	奥壁幅(m)	玄門幅(m)	羨道長(m)	羨道幅(m)	床面積(㎡)	玄室床面	排水溝	袖形	出土遺物								時期	文献
																馬具	鉄刀	刀子	鉄鏃	耳環	玉類	釘	その他		
1	蓑神５号墳（東支群）	寒川	丘陵尾根	～14	西	4.17	2.67	1.55	0.8	1.5	1.06	4.1	礫床	石蓋	両袖			●	●	●	●			7世紀初め～7世紀前半	
2	蓑神６号墳（東支群）	寒川	丘陵斜面	～6	南		1.36	0.95	0.6	0.85	0.76		礫床	素掘礫詰	右袖				●					7世紀前半	
3	蓑神塚古墳（西支群）	寒川	丘陵裾部	～15？	南		4.4	1.9	1.12		1.18	8.4	礫床		両袖						●	●		7世紀前半	A
4	中尾古墳	寒川	丘陵尾根	20？	南	9.96	5.2	2.74	1.24	4.8	2	14.2	礫床	石蓋	両袖		●				●			6世紀後半～	B
5	大末３号墳	寒川	丘陵尾根	12	南	4.5	2.44	1.52	0.8	1.8	1.04	3.7	礫床	石蓋礫詰	両袖			●	●	●				7世紀初め～7世紀前半	C
6	大末４号墳	寒川	丘陵尾根	12～13	南	3.86	2.58	1.18	0.7	1.28	0.82	3	礫床	石蓋	両袖			●						7世紀初め～7世紀前半	C
7	奥12号墳	寒川	丘陵鞍部	6～8	南	6.1	3	1.23	0.9	3		3.7	礫床		両袖	●	●		●					6世紀末～	D
8	奥15号墳	寒川	丘陵尾根	～10	南	3.7	2	0.92	0.72	2.55	0.9	1.8	礫床		右袖	●		●	●					6世紀後半～	D
9	奥16号墳	寒川	丘陵尾根		南	5	2.2	1.3	0.9	2.8	0.94	2.9	礫床		左袖	●	●		●	●	●			6世紀後半～	D
10	大石北谷古墳	長尾	丘陵裾	5～8	南	8.49	4.21	1.73	1.05	3.94	2.14	7.3	礫床		両袖									7世紀前半～後半	E
11	前山１号墳	長尾	丘陵尾根	11.7	南	5.61	2.76	1.2	0.86	2.56	0.98	3.3			両袖							●	鉄細片	7世紀前半～後半	F
12	椋の木古墳	長尾	丘陵斜面		南	6.32	3.53	2	0.92	2.4	1.79	7.1	礫床	石蓋	両袖									7世紀初め～末	E
13	北山八坂古墳１号石室	長尾	丘陵尾根	14～15	南西	6.58	3.48	1.6	0.9	3.1	1.16	5.6	礫床		両袖	●註1		●	●	●註2	●			6世紀後半～7世紀中葉	G
14	北山八坂古墳２号石室				南西		3.3	1.02				3.8	礫床		両袖？			●		●	●			7世紀前半	
15	尾崎西遺跡ＳＴ-162	長尾	低丘陵末端	11	西		3.3	1.3	0.88	1.8	0.65	4.3	礫床		右袖	●註3	●		●	●	●			6世紀末～7世紀前半	H
16	陰浦１号墳	長尾	丘陵斜面	5～6	南南西	3.73	1.84	0.63				1.6			無袖									7世紀前半～末	I
17	陰浦２号墳	長尾	丘陵斜面		南東		2.72	0.96				2.6			両袖			●		●				7世紀前半～末	I
18	緑ヶ丘２号墳	長尾	丘陵斜面	12～13		6.6	3.2	1.9		3.4	0.8	6	礫床	素掘	右袖		●註4	●		●	●		木棺金具	7世紀初め～7世紀前半	J
19	相ノ山１号墳	寒川	丘陵突端	10？	西	5	2.8	1.7		2.2	0.98	4.7		石蓋？	有袖？	●							皿状鉄製品	6世紀末～7世紀前半？	C
20	柴谷古墳群所在石室	大川	丘陵斜面			6.1	4.2	1.36		1.9	1.6	6.2	礫床		両袖										K

参考文献

A 「蓑神塚古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報平成13年度』2003　香川県教育委員会
B 『中尾古墳発掘調査報告書』1983　寒川町教育委員会
C 『寒川町史』1985　寒川町史編集委員会
D 古瀬清秀「付節　雨滝山遺跡群」『寒川町史』1983　寒川町史編集委員会
E 『椋の木古墳・大石北谷古墳調査報告書』1989　長尾町教育委員会
F 『前山古墳群調査報告』1981　長尾町教育委員会
G 『八坂墳墓群・北山八坂古墳』1997　長尾町教育委員会
H 『尾崎西遺跡　平成4年度　』1993　香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター
I 「陰浦1号墳・陰浦2号墳発掘調査報告」『ふるさと長尾第3号』1980　長尾町文化財保護協会
J 『長尾町史』1986　長尾町史編集委員会
K 六車恵一「大川郡にある二、三の古墳に就いて」『文化財協会報特別号第2集』1957　香川県文化財保護協会

註

1 墓道より出土
2 中空耳環2点出土
3 素環鏡板2枚　引き手金具2　ハミ一式　鉄地金銅張雲珠脚部推定品出土。
4 刀装具



第20図　玄室規模区分図

に応じたものとおもわれるが、6号墳はその状況によって選択されたとも考えられる。なお、当古墳群周辺の古墳にも中尾古墳をはじめ、大末3・4号墳や相ノ山1号墳および長尾町の一部にもみられる。県内ではまとまりをもってみられる地域の一つといえる。(4)

3.　古墳群の様相

先ず、立地から古墳群の構成をみると、丘陵尾根上とこの東側につづく谷状地形の斜面に位置する2グループに大別することができる。後者はさらにグルーピングできるものとおもわれ、当古墳群は2～4基のまとまりを最小単位として、これが3基集まったものと考えられる。調査によって明らかにはなっていないが概況をみると、丘陵上5号墳の北側には近接して6号墳が所在している。6号墳は5号墳よりやや小さいかもしくは同規模とおもわれる円墳で、埋葬施設は横穴式石室とされる。他方、東側斜面グループの古墳はいずれも、6号墳とほぼ同様な規模の小さい古墳ばかりで埋葬施設は不明である。この状況は5号墳と6号墳との比較によって、表されているとみて大過ないと考える。立地およびその規模・副葬品など、どの属性をみても5号墳と6号墳との間には格差が存在する。5号墳は墓域内に優先的に築造された家族墓である。一方で6号墳の横穴式石室は玄室長推定2m前後・幅0.95m、羨道長0.85m・羨道幅0.76mと、単人埋葬用とみなせるまでの小型石室に矮小化している。ではこの差についてであるが、6号墳の時期比定は出土遺物からは判断できない。石室の矮小化を時間的推移の後出的な要素とすることができるかどうかであるが、奥古墳群において6世紀後半～末頃に同規模の左袖式横穴式石室である、奥15号墳の所在が認められるのである。奥15号墳と5号墳との時期差が僅かで、6号墳の羨道が奥15号墳より短小化しており、やや後出するにしても、6号墳と5号墳との間に大きな年代差があるものではないと想定する。ここでは階層による差異を想定し、5号・6号墳の位置付けを副葬品の内容からみると、

5号墳は馬具や鉄刀がみられないことから、通有の横穴式石室墳のなかでは低位の家父長層といえる。6号墳はこれに比してさらに下位にあたるものといえ、家族墓的な横穴式石室墳をもつものとしては最も低位のものであると考えられる。(5)　このように蓑神古墳群東支群は、おおむね同時期とされる複数の造墓主体によって形成された古墳群といえる。丘陵上では5号墳から4号墳への継起的築造が考えられる。斜面グループの最小単位でも同様であったとおもわれる。

4.　集落と古墳群

蓑神古墳群東支群のあり方については上記のように考えるが、周囲の状況を俯瞰して地域のなかにおいてどのように位置付けられるかである。当古墳群に隣接する東側丘陵には相の山古墳群・極楽寺古墳群などが、西側には蓑神古墳群西支群が所在している。消滅したものが多いが、各々10基ほどの古墳が所在していたとされる。この他に、6世紀末頃に築かれた東讃最大の規模をもつ巨石墳である中尾古墳が所在し、つづく7世紀前半の蓑神塚古墳と首長墓系譜をなす。また、集落跡との関連をみるならば、すぐ北の洪積台地上には森広遺跡群が位置する。森広遺跡群では平成7年の調査において弥生時代の遺構のほか、古墳時代後期～終末期にかけての竪穴住居跡が50棟以上検出されている。これまでの調査を含めると当該期最大規模の集落跡とされる。各古墳群はこの森広遺跡群を取り囲む丘陵に位置することからして、森広遺跡群を生活域とした集団の墓域と想定される。したがって各古墳群は、森広遺跡群における同族的政治秩序のもとでの造墓活動の総体として、一つの古墳群（仮に森広遺跡古墳群とする）を形成しているととらえる。森広古墳群については中尾古墳から蓑神塚古墳までの、おおむね2世代の時間幅を有していると考えられる。ただ、当初から中尾古墳を最上位とする古墳群形成がおこなわれ、そこには旧長尾町尾崎西遺跡古墳群のような、造墓集団内の階層分化の進展と造墓権の拡大があったものと想定される。(6)

個別の古墳をあげて階層構造を指摘することはできない。中尾古墳より下位にあたる横穴式石室墳をもつものにあって、蓑神古墳群東支群についてはやはり下位層の墓域に比定される。5号墳より上の中～上位層については階層ごとの小単位でもってまとまり、支群として墓域を構成していたとおもわれ、相ノ山1号・2号墳などにその一端が見てとれよう。また、6号墳より造墓集団内では下位になる、横穴式石室墳を築造できない尾崎西遺跡古墳群ＳＴ－03のような土坑墓をもった造墓主体層は丘陵ではなく、集落内外の平地に隣接して墓域が所在するものとおもわれる。(7)

当該期の長尾平野における集落の実態は不明なところが多い。ただ、その中央部には拠点的な集落が旧町単位に所在していたと考えられる。長尾では尾崎西遺跡から辛立遺跡にかけて、大川では千町遺跡から石仏遺跡にかけて、寒川は前記したように森広遺跡群である。この中でも森広遺跡群は後代の郡衙所在地と推定される。中尾古墳の所在もふくめるとその影響範囲は広くおよんでいたものといえる。(8)　他の集落と比較してその階層と造墓活動において、より多様的であったことが想定される。

註

(1) 田辺昭三『須恵器大成』1981

(2) 尾崎西遺跡において6世紀中葉頃の古墳群が検出され、うち1基に横穴式石室墳が確認されている。
「尾崎西遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成6年度』1995　香川県教育委員会

(3) 國木健司「香川の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』1995　古代学協会四国支部第9回徳島大会資料

(4) 國木健司『雲岡古墳発掘調査報告書』1987　豊浜町教育委員会
森格也「横穴式石室の下部構造」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集下巻－』2002　古代吉備研究会

(5) 床面積1・2類の古墳の多くは副葬品の様相が不明であるが、鉄製品において馬具・鉄刀・鉄鏃及び刀子を鉄刀の副次的代用とみなし、その組み合わせをみると（A）馬具＋鉄刀＋鉄鏃、（B）馬具＋刀子＋鉄鏃、（C）鉄刀＋刀子＋鉄鏃、（D）刀子＋鉄鏃、（E）鉄鏃または刀子のみ、（F）なし、の類型が設定される。（A）を上位とし（F）への階層性を想定される。
新納泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻3号　1983

(6) 蔵本晋司「香川県における古墳時代中期群小墳小考」『研究紀要Ⅱ』1994　香川県埋蔵文化財調査センター

(7) 平成11年の発掘調査において古墳時代後期とされる石室状遺構2基と土坑が検出されている。石室状遺構は規模約1.6×0.8mのもので、土坑墓とともに単葬墓の上位下位をなすものとおもわれる。
「森広遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成10年度』2000　香川県教育委員会

(8) 大山真充「讃岐の国造について」『香川史学』第8号　1979

参考文献

『尾崎西遺跡平成4年度－県道高松長尾大内線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』1993　香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター
『森広遺跡－大型店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』1997　寒川町教育委員会
『寒川町史』1985　　寒川町史編集委員会

付　章　　さぬき市蓑神５号墳出土の人骨

香川医科大学法医学教授
井尻　　巌

平成15年3月17日付け、さぬき市市長赤澤　申也殿との委託契約に基づき、以下の試料について、鑑定を行い本鑑定書を作成した。

1. 鑑定試料

蓑神5号墳出土骨：番号1～26

鑑定に使用した試料は骨並びに歯牙であるが、風化が進行して、ほとんどが細片化し、容易に崩壊する状態であり、かつ多量の泥を付着しているためすべての試料の検査は不能であり、比較的現状を留めている試料について検査を行った。

2. 歯牙の検査

本学歯科口腔科小川尊明助手の協力を得て行った。

番号10（写真1）は左下第1大臼歯

番号11（写真2）は右下第２小臼歯の可能性が高い。

番号13（写真3）は左上第1大臼歯

番号14（写真4）は左下第1大臼歯

番号18は風化が進行しているが、右下第1または第2小臼歯

番号21（写真5）は左上第1または第2大臼歯

番号22（写真5）は左上第2または第3大臼歯

その他の歯牙については、風化が進行し、詳細は不明である。歯牙の検査は、番号10と14は同一の部位の可能性が高い。また、歯の状態から、番号10、11、13、21、及び22は高齢者の歯牙で、番号14及び18は若い歯牙であり、明らかに年齢差がみられることから、少なくとも2人の人物の歯である可能性が高い。また、番号10と番号13は咬合面がほぼ一致することから同一人物の歯と思われる。

3. 骨の検査

番号7（写真6）は頭蓋冠の断面であるが、断面のすべてに傾斜が比較的緩やかであることから、前頭骨ないし頭頂骨の断片の可能性が高い。断片のなかに内板側に綾を有する断片が認められるが、これは前頭骨の前頭綾の科の可能性が高い。

頭蓋骨には外板と内板の間に海面質（ないし海面骨）が存在するが、断片のほとんどに幅を有する海面質が認められることから、この頭蓋骨は若い人の頭蓋の可能性が高い。個人差はあるが、高齢者では海面質が吸収されたり、骨化して頭蓋骨の幅が狭くなる。

番号9（写真7）の長管骨は脛骨と思われるが、上端と下端が崩壊しているため、左右や老若の区別は不明である。

4. 血液型検査

検査を行った歯牙6本（番号18を除く）、頭蓋骨の断片並びに脛骨について解離試験により血液型検査を行った結果、総べてＢ型と判定された。

5. ＤＮＡ検査

血液型の検査を行った総ての試料について、ＰＣＲ法によりＤＮＡ抽出並びに増幅を試みたが、いずれの試料からもＤＮＡは増幅されず、ＤＮＡ検査はできなかった。

鑑　定　結　論

以上の検査結果に基づき、今回の検査試料から、以下のように結論する。

検査試料には高齢者の歯牙と若年者の歯牙が混在し、また頭蓋骨は若年者の断片の可能性が高く、検査試料の血液型は総てＢ型と判定された。日本人ではＢ型の頻度は比較的低く、両者は血縁者の可能性が高い。なおＤＮＡ検査は不能であったため、男女の別は判定出来なかった。

平成15年3月27日

試料番号	写真番号	出土位置	備　　考
10	1	―	玄室排土出土
11	2	骨C	アゴ骨付近出土
13	3	骨D	腰骨付近出土
14	4	骨C	アゴ骨付近出土
18	―	骨C	アゴ骨付近出土
21	5	骨C	アゴ骨付近出土
22	5	骨C	アゴ骨付近出土
7	6	骨B	頭骨
9	7	骨A	奥壁付近出土　脛骨

第9図石室内遺物出土状況図参照

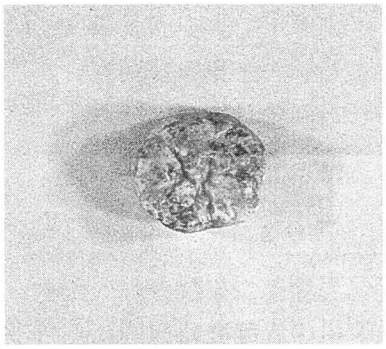


写真１

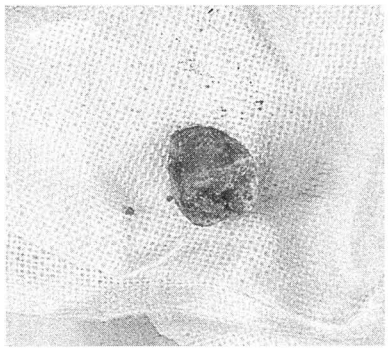


写真２

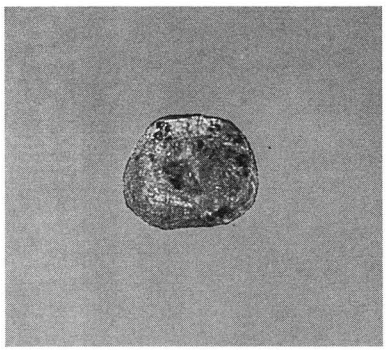


写真３

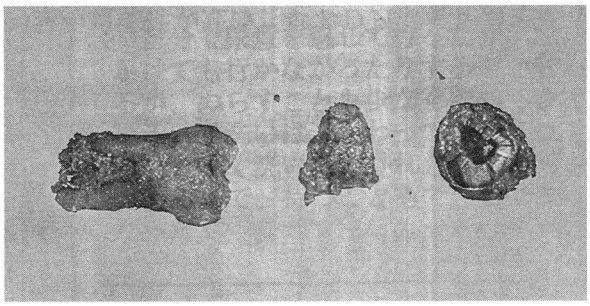


写真４

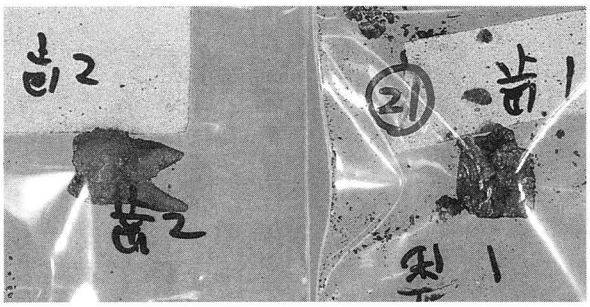


写真５

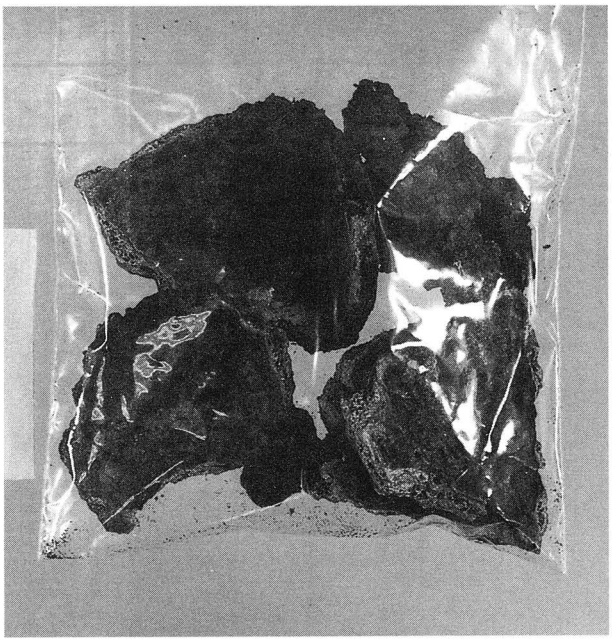


写真６

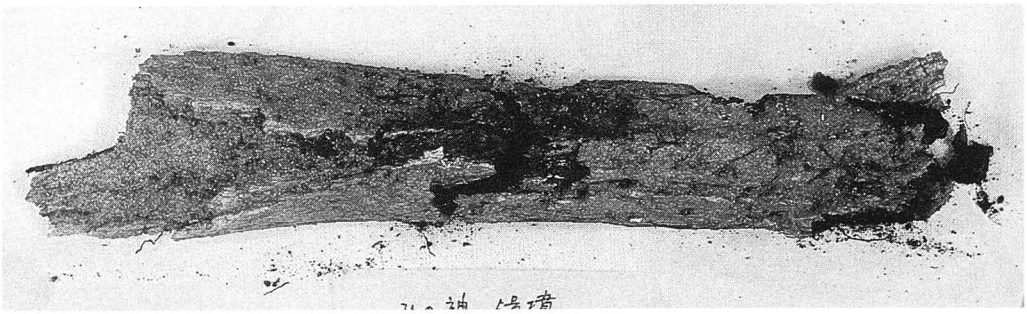


写真７

蓑神５号墳出土土器観察表

掲載番号	種別	器種	法量（cm）		残存状況	色調	焼成	胎土	特徴
			口径	器高					
1	須恵器	杯蓋	11.8	4.3	完形	胎土）灰色（5Y6/4） 釉）オリーブ黒色（7.5Y3/2～灰オリーブ（7.5Y4/2）	良	1mm以下の砂粒多	2と対
2	須恵器	杯身	10.2	3.2	ほぼ完形	灰色（N6/0）	良	3mm以下のさ粒少	1と対　外面1/4ほど銀色化変色の違い
3	須恵器	杯蓋	12.7	3.7	ほぼ完形	暗青灰色（10BG4/1）	良	1mm以下の砂粒	4と対
4	須恵器	杯身	11.3	4.1	完形	緑灰色（10G5/1）	良	1mm以下の砂粒	3と対
5	須恵器	杯蓋	13.8	4.7	完形	灰色（7.5Y5/1）	良	3mm以下のさ粒極少	6と対
6	須恵器	杯身	15.0	4.9	ほぼ完形	灰色（N4/0）	良	1mm以下の砂粒極少	5と対
7	須恵器	杯身	11.7	4.2	完形	灰色（N5/0）	良	1mm以下の砂粒少	
8	須恵器	杯身	12.4	5.8	完形	灰色（N7/0）	良	やや精良	
9	須恵器	杯蓋	12.3	4.2	完形	灰色（N5/0）	良	1mmの砂粒極少	
10	須恵器	杯蓋	14.6	4.8	完形	灰色（N6/0）	良	2mm以下の砂粒少	
11	須恵器	杯蓋	(15.0)	—	口径の1/5	灰色（5Y6/1）	良	精良	
12	須恵器	杯身	10.5	4.3	完形	灰色（5Y6/1）	良	1mm以下の砂粒多	
13	須恵器	杯身	12.5	4.5	完形	灰色（N5/0）	良	1mm以下の砂粒極少	
14	須恵器	杯身	14.3	4.2	ほぼ完形	灰白色（2.5Y8/1）外面受部1/4近く　灰色（N6/0）いぶし銀	良	1mm以下の砂粒多	
15	須恵器	杯身	(15.0)	—	口径の1/4	灰色（N5/0）	良	やや精良	受部径15.0cm（復元）
16	須恵器	高杯	(14.2)	—	口径の1/6	灰色（N6/0）	良	やや精良	
17	須恵器	高杯脚	—	—	少片	外）黄灰色（2.5Y5/1）内）灰白色（2.52Y7/1）釉）オリーブ灰（10Y5/2）	良	やや精良	
18	須恵器	壺	—	—	少片	灰色（N5/0）	良	やや精良	
19	須恵器	壺	(11.3)	—	口径の1/6 肩部の1/3	灰色（5Y5/1）	良	3×6mmの少礫 やや精良	体部にかき目

蓑神６号出土土器観察表

掲載番号	種別	器種	法量（cm）		残存状況	色調	焼成	胎土	特徴
			口径	器高					
1	須恵器	甕	(29.0)	—	口径の1/8	灰色（N5/0）	良	1mmの砂粒少	
2	弥生土器	壺	(19.4)	—	口径の1/5	外）にぶい黄橙色（10YR/4） 内）灰黄褐色（10YR4/2）	やや良	1mmの砂粒多	口縁端部と口縁内部に円形浮文

蓑神５号墳出土鉄器観察表

掲載番号	種別	残存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備考	掲載番号	種別	残存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備考
20	鏃	14.6	1.3	1.3	17.9		38	鏃	6.5	0.8	0.3	5.5	
21	鏃	13.8	1.3	0.4	17.1		39	鏃	4.3	1.1	0.5	3.1	
22	鏃	13.0～	1.4	0.5	13.2		40	鏃	10.1	3.7	0.6	23.0	
23	鏃	12.4	1.1	0.6	13.8		41	鏃	9.7	5.0	0.4	30.0	
24	鏃	12.8	1.1	0.7	14.4		42	鏃	10.6	2.9	0.4	18.5	
25	鏃	12.3	1.1	0.8	16.1		43	鏃	10.6	3.0	0.7	22.2	
26	鏃	10.4	1.2	0.6	14.3		44	鏃	5.6	2.8	0.5	10.7	
27	鏃	11.1	1.1	0.6	9.6		45	鏃	8.4	2.5	0.4	10.8	
28	鏃	4.3	1.4	0.6	4.0		46	鏃	7.5	1.6	1.6	12.2	
29	鏃	3.4	1.2	0.3	2.8		47	鏃	4.4	1.2	0.5	4.1	
30	鏃	3.1	1.2	0.3	3.1		48	鏃	2.8	1.2	0.5	2.9	
31	鏃	2.9	1.0	0.4	2.4		49	鏃	4.1	2.9	0.5	7.4	
32	鏃	3.0	1.1	0.3	2.1		50	鏃	4.1	1.2	0.6	4.0	
33	鏃	2.4	0.8	0.3	1.3		51	鏃	3.4	1.1	0.7	5.2	
34	鏃	8.9	1.4	0.6	12.5		52	鏃	2.7	0.9	0.6	3.0	
35	鏃	8.3	1.2	0.7	7.0		53	鏃	2.0	0.5	0.3	0.5	
36	鏃	6.5	1.0	0.5	8.4		54	鏃	2.1	0.3	0.3	0.6	
37	鏃	10.9	1.0	0.7	6.3		55	刀子	9.3	1.9	0.8	12.4	

蓑神６号墳出土鉄器観察表

掲載番号	種別	残存長（cm）	最大幅（cm）	最大幅（cm）	重　量（g）	備考
20	鏃	3.7	0.6	0.35	1.9	

蓑神５号墳出土耳環観察表

掲載番号	外径(cm)		断面形(cm)		重量(g)	備考
	(上下)	(左右)	(上下)	(左右)		
56	2.6	2.9	0.6	0.6	10.8	銅地銀貼　57と対
57	2.6	2.8	0.55	0.5	9.6	銅地銀貼　56と対
58	3	3.3	0.8	0.9	6.9	中空銅管銀貼環
59	2.3	2.6	0.5	0.6	10.2	銅地銀貼　60と対
60	2.4	2.6	0.55	0.7	10.1	銅地銀貼　59と対
61	1.3	1.35	0.2	0.2	0.5	小型細環

蓑神５号墳出土玉類観察表

掲載番号	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調	備考
62	勾玉	23	8	3	2.8	瑪瑙	黄褐色	
63	勾玉	24	7	2.5	2.4	滑石	灰白色	
64	切子玉	34	19	1.5	10.2	水晶	透明色	1/4ほど破損　孔にガラス小玉が入る
65	切子玉	18	13	3.5	3.4	水晶	透明色	
66	切子玉	16	12	4	2.7	水晶	透明色	
67	切子玉	13	13	4	2.1	水晶	透明色	
68	算盤玉	14.5	9	4	3.3	水晶	透明色	
69	算盤玉	9	12	3	1.8	水晶	透明色	
70	棗玉	16	11	2.5	1.9	土	暗灰色	1/4ほど破損
71	棗玉	19	12	3.5	1.1	琥珀	明褐色	
72	小玉	7.5	13	1.5	0.7	ガラス	紺色	
73	小玉	5	9	2.5	0.3	ガラス	透明紺色	
74	小玉	6	7	2	0.4	ガラス	透明紺色	
75	小玉	5.5	8	4	0.4	ガラス	紺色	
76	小玉	6	9	4	0.5	ガラス	青色	
77	小玉	5.5	8	1	0.2	ガラス	透明紺色	
78	小玉	7	6	1.5	0.4	ガラス	紺色	
79	小玉	6	7	2	0.4	ガラス	透明紺色	
80	小玉	41	7	1	0.1	ガラス	透明紺色	
81	小玉	4.5	6	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
82	小玉	4.5	4.5	1	0.1	ガラス	透明青色	
83	小玉	4	5.5	2	0.1	ガラス	青緑色	
84	小玉	2.5	6	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
85	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	透明緑色	
86	小玉	3	5	1	0.1	ガラス	透明青色	
87	小玉	4	5	1	0.1	ガラス	紫色	
88	小玉	4	5	1	0.1	ガラス	黄色	
89	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	青色	
90	小玉	4	5	1.5	0.1	ガラス	透明水色	
91	小玉	4	5	1.5	0.1	ガラス	紺色	
92	小玉	3	4	1.5	0.1	ガラス	黄色	
93	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
94	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
95	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	黄緑色	
96	小玉	5	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
97	小玉	4	5	1.5	0.1	ガラス	透明青緑色	
98	小玉	4	4×5	1	0	ガラス	透明水色	
99	小玉	3	5	1	0.1	ガラス	透明水色	
100	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
101	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄緑色	
102	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄緑色	
103	小玉	4	5	1	0.1	ガラス	水色	
104	小玉	5	5	1	0.1	ガラス	緑色	
105	小玉	3.5	5	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
106	小玉	4	4	1	0.1	ガラス	黄色	
107	小玉	3.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
108	小玉	3.5	4.5	1	0.1	ガラス	透明水色	
109	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
110	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
111	小玉	3	4	1.5	0.1	ガラス	透明水色	
112	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
113	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
114	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	緑色	
115	小玉	3	4	1.5	0.1	ガラス	緑色	
116	小玉	4	5	1	0.1	ガラス	透明緑色	
117	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	透明青緑色	

掲載番号	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調	備考
118	小玉	1	2	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
119	小玉	2	3.5	1	0.1	ガラス	黄色	
120	小玉	2	3.5	1	0.1	ガラス	黄色	
121	小玉	2.5	5.5×4	1.5	0.1	ガラス	透明青色	
122	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
123	小玉	2.5	44	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
124	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明紺色	
125	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
126	小玉	1.5	4	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
127	小玉	2.5	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
128	小玉	2	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
129	小玉	2	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
130	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
131	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
132	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	透明淡緑色	
133	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
134	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	黄色	
135	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	黄色	
136	小玉	2	3.5	1	0.1	ガラス	黄色	
137	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
138	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
139	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	黄色	
140	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明紺色	
141	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
142	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
143	小玉	2.5	3.5	1	0.1	ガラス	透明水色	
144	小玉	2.5	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡紫色	
145	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	黄色	
146	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
147	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
148	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
149	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
150	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
151	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
152	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
153	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
154	小玉	1.5	3.5×4	1	0	ガラス	黄色	
155	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
156	小玉	1.5	3	1.2	0.1	ガラス	透明緑色	
157	小玉	3	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
158	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
159	小玉	2	3	1	0	ガラス	透明青緑色	
160	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
161	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	黄色	
162	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
163	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
164	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明緑色	
165	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
166	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
167	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	黄色	
168	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	透明青色	
169	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
170	小玉	2.5	4	1.5	0.1	ガラス	黄色	
171	小玉	3	4	0.8	0.1	ガラス	深緑色	
172	小玉	3	5	1	0.1	ガラス	透明紺色	
173	小玉	4	5	2	0.1	ガラス	透明紺色	
174	小玉	2.5	3.5	1	0.2	ガラス	緑色	
175	小玉	5	8	1.5	0.1	ガラス	紺色	
176	小玉	4	6	2	0.4	ガラス	紫色	
177	小玉	4	6	1.5	0.2	ガラス	青緑色	
178	小玉	3	4.5	1	0.2	ガラス	透明水色	
179	小玉	2.5	4	1.5	0.1	ガラス	透明青色	
180	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
181	小玉	3	4	1.2	0.1	ガラス	黄色	
182	小玉	3.5	4	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
183	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	

掲載番号	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調	備考
184	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	黒色	
185	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
186	小玉	4	3	1	0.1	ガラス	透明青色	
188	小玉	2	3	1	0	ガラス	黄色	
189	小玉	2	3	1	0	ガラス	透明水色	
190	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	青緑色	
191	小玉	3	3	1	0	ガラス	透明淡青緑色	
192	小玉	1.5	3	1	0	ガラス	透明紺色	
193	小玉	1.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
194	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
195	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
196	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	水色	
197	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	黄色	
198	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
199	小玉	1.5	3	1	0	ガラス	黄色	
200	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
201	小玉	2.5	4	0.8	0.1	ガラス	緑色	
202	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	黄色	
203	小玉	2	3	1	0	ガラス	透明淡青緑色	
204	小玉	1.5	3	1	0	ガラス	青緑色	
205	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
206	小玉	2	3	1	0	ガラス	透明薄青緑色	
207	小玉	1.5	3	0.8	0.1	ガラス	透明緑色	
208	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
209	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
210	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
211	小玉	3	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
212	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	黄色	
213	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
214	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	透明紺色	
215	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
217	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
218	小玉	3.5	2.5	1	0.1	ガラス	黄色	
218	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
219	小玉	2	3	1	0	ガラス	黄緑色	
220	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	透明水色	
221	小玉	3	4	1	0.1	ガラス	黄色	
222	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
223	小玉	3	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
224	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
225	小玉	2.5	4	1	0.1	ガラス	黄色	
226	小玉	1	3	1	0	ガラス	透明青緑色	
227	小玉	2.5	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
228	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
229	小玉	2	3×4	1	0.1	ガラス	透明青緑色	楕円形
230	小玉	2.5	3	0.8	0.1	ガラス	紺色	
231	小玉	1	2	0.8	0.1	ガラス	透明青緑色	
232	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
233	小玉	1.5	3	1	0	ガラス	透明水色	
234	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明青緑色	
235	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明紺色	
236	小玉	2	3.5	1	0.1	ガラス	黄色	
237	小玉	2.5	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
238	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
239	小玉	2.5	3	1	0	ガラス	透明淡青緑色	
240	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明紺色	
241	小玉	2.5	3	0.8	0.1	ガラス	緑色	
242	小玉	2.5	3.5	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
243	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	黒色	
244	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
245	小玉	2	3	1	0	ガラス	透明淡青緑色	
246	小玉	1.5	3	1	0.1	ガラス	透明水色	
247	小玉	2	4	1	0.1	ガラス	黄色	
248	小玉	2	3	1	0.1	ガラス	透明淡青緑色	
249	小玉	3	3.5	1	0.1	ガラス	黄色	
250	練玉	7	－	1.5	0.1	土	黒色（10YR2/1）	

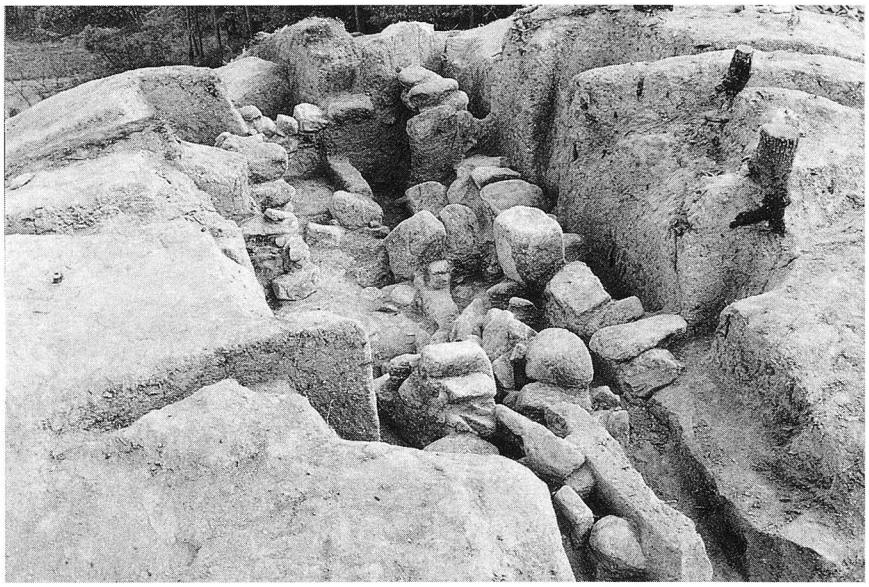
掲載番号	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調	備考
251	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
252	練玉	7	7	1	0.3	土	黒色（N2/0）	
253	練玉	6	7	1.5	0.1	土	黒褐色（10YR3/1）	
254	練玉	6.5	8×6.5	2	0.1	土	黒色（10YR2/1）	
255	練玉	6.5	7	1.2	0.4	土	灰黄褐色（10YR4/2）	
256	練玉	7	7	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
257	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒褐色（2.5Y3/1）	
258	練玉	7	7.5	1.5	0.4	土	黒色（N2/0）	
259	練玉	6.5	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
260	練玉	5.5	7.5	1.5	0.3	土	灰黄褐色（10YR5/2）	
261	練玉	6.5	7	1.5	0.3	土	灰黄褐色（10YR5/2）	
262	練玉	7	7	1	0.3	土	黒褐色（10YR3/2）	
263	練玉	7	7	1	0.4	土	黒色（N2/0）	
264	練玉	8	8	1	0.4	土	黒色（7.5Y7/1）	
265	練玉	6.5	7	1.5	0.2	土	黒色（N2/0）	
266	練玉	6.5	7.5	1	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
267	練玉	8	7	1.5	0.4	土	黒色（N2/0）	
268	練玉	6	7	1	0.3	土	黒色（N2/0）	
269	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
270	練玉	6	7	1.5	0.4	土	黒色（N1.5/0）	
271	練玉	7	7	2	0.3	土	灰黄褐色（10YR5/2）	
272	練玉	6	7	2	0.4	土	褐灰色（10YR4/1）	
273	練玉	6.5	7.5	1.5	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
274	練玉	7	8	1.5	0.3	土	黒色（N1.5/0）	
275	練玉	6.5	8	1.5	0.3	土	黒色（N1.5/0）	
276	練玉	7	7×8	1.5	0.4	土	黒色（10YR1.7/1）	
277	練玉	6	8	2	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
278	練玉	7	7	1	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
279	練玉	6.5	7	1.5	0.3	土	暗灰色（N3/0）	
280	練玉	6	7	1.5	0.4	土	黒色（10YR2/1）	
281	練玉	6	7	1	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
282	練玉	6	8×7	1.5	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
283	練玉	6	7	1	0.3	土	黒色（N2/0）	
284	練玉	7	7	1.2	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
285	練玉	9	8	1	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
286	練玉	6	7	1.2	0.2	土	褐灰色（10YR4/1）	
287	練玉	6	7	1.5	0.3	土	灰黄褐色（10YR5/2）	
288	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
289	練玉	7	7	2	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
290	練玉	6	7	1.2	0.3	土	黒褐色（10YR3/2）	
291	練玉	6.5	8	1	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
292	練玉	6.5	8	1.5	0.4	土	黒褐色（10YR3/1）	
293	練玉	7	8	2	0.3	土	黒色（N2/0）	
294	練玉	6	6.5	1.5	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
295	練玉	6.5	8	1.5	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
296	練玉	7	8	1	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
297	練玉	7	8	1.5	0.2	土	黒色（N2/0）	
298	練玉	6.5	8	1.5	0.4	土	黒色（10YR2/1）	
299	練玉	6	7	1.5	0.3	土	灰黄褐色（10YR4/2）	
300	練玉	5	7	1.5	0.2	土	黒褐色（10YR3/1）	
301	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
302	練玉	6	8	2	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
303	練玉	－	－	1	0.2	土	褐灰色（10YR4/1）	
304	練玉	5.5	8×6.5	1	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
305	練玉	6	7	1	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
306	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
307	練玉	7	7.5	1	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
308	練玉	7	8	2	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
309	練玉	6.5	8	1.5	0.4	土	褐灰色（10YR4/1）	
310	練玉	6	7	1.5	0.2	土	黒褐色（10YR3/1）	
311	練玉	6.5	7.5	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
312	練玉	6.5	7	1.5	0.4	土	灰黄褐色（10YR4/2）	
313	練玉	6	7	1.5	0.2	土	黒色（10YR2/1）	
314	練玉	7	8	1.5	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
315	練玉	6	7	1	0.4	土	黒褐色（10YR3/1）	
316	練玉	7	8	2	0.3	土	黒色（10YR2/1）	

掲載番号	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調	備考
317	練玉	6.5	7	1.5	0.2	土	褐灰色（10YR4/1）	
318	練玉	7	8	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR5/1）	
319	練玉	7	7	1	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
320	練玉	7	7	2	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
321	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
322	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
323	練玉	6	7.5	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
324	練玉	6.5	8	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
325	練玉	8	8×7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
326	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
327	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
328	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/2）	
329	練玉	6	7	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
330	練玉	7	7	1.5	0.4	土	黒褐色（10YR3/1）	
331	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒褐色（2.5Y2/1）	
332	練玉	7	8	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR5/1）	
333	練玉	5.5	7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
334	練玉	6	7×8	1.5	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
335	練玉	7	7	1.5	0.1	土	褐灰色（10YR5/1）	
336	練玉	6	7	2	0.4	土	黒色（N2/0）	
337	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
338	練玉	7	7×8	1.5	0.3	土	黒色（10YR2/1）	
339	練玉	6.5	6×8	2	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
340	練玉	6.5	7	1	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
341	練玉	6.5	7	1.5	0.4	土	黒褐色（10YR3/1）	
342	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/2）	
343	練玉	6	7	1	0.3	土	黒色（N2/0）	
344	練玉	7	7.5	1	0.3	土	黒色（N2/0）	
345	練玉	7	7	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
346	練玉	7	8	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
347	練玉	5.5	7.5	1.5	0.3	土	灰黄褐色（10YR5/2）	
348	練玉	6.5	7×8	1.5	0.3	土	黒色（N2/0）	
349	練玉	6.5	7	1	0.3	土	灰黄褐色（10YR4/2）	
350	練玉	－	7.5	1	0.3	土	黒色（N2/0）	
351	練玉	7.5	8	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
352	練玉	6.5	8	1.5	0.3	土	灰黄褐色（10YR5/2）	
353	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒褐色（10YR3/1）	
354	練玉	7	8	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
355	練玉	7	7	1.5	0.4	土	黒褐色（2.5Y2/1）	
356	練玉	7	8	1.5	0.4	土	黒色（N2/0）	
357	練玉	7	7	1	0.4	土	黒褐色（10YR3/2）	
358	練玉	6.5	8	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
359	練玉	6	6	1	0.4	土	褐灰色（10YR5/1）	
360	練玉	6.5	7	1.5	0.3	土	暗灰色（N4/0）	
361	練玉	6.5	7	1.5	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
362	練玉	7	7	1.5	0.3	土	暗灰色（N4/0）	
363	練玉	7	7	1	0.3	土	褐灰色（10YR4/1）	
364	練玉	6	7	1.5	0.3	土	黒色（N1.5/0）	
365	練玉	7	7	1.5	0.4	土	褐灰色（10YR4/1）	
366	練玉	6.5	7	1	0.3	土	黒色（10YR2/1）	

図　　版

1　5号墳調査前状況

2　5号墳表土剥後墳丘状況



3　5号墳横穴式石室調査状況

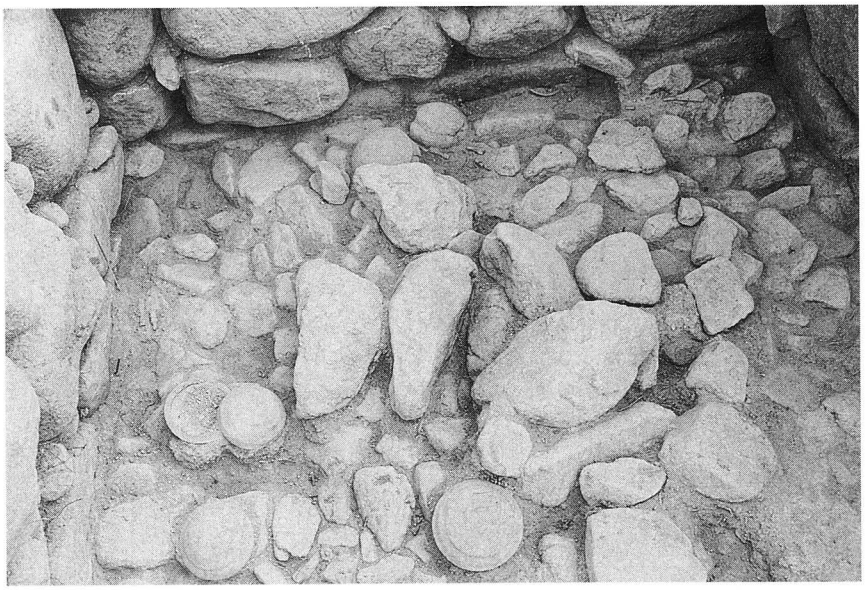
図版 2

1　玄室床面調査状況

2　玄室遺物出土状況①

3　玄室遺物出土状況②

1　玄室遺物出土状況③



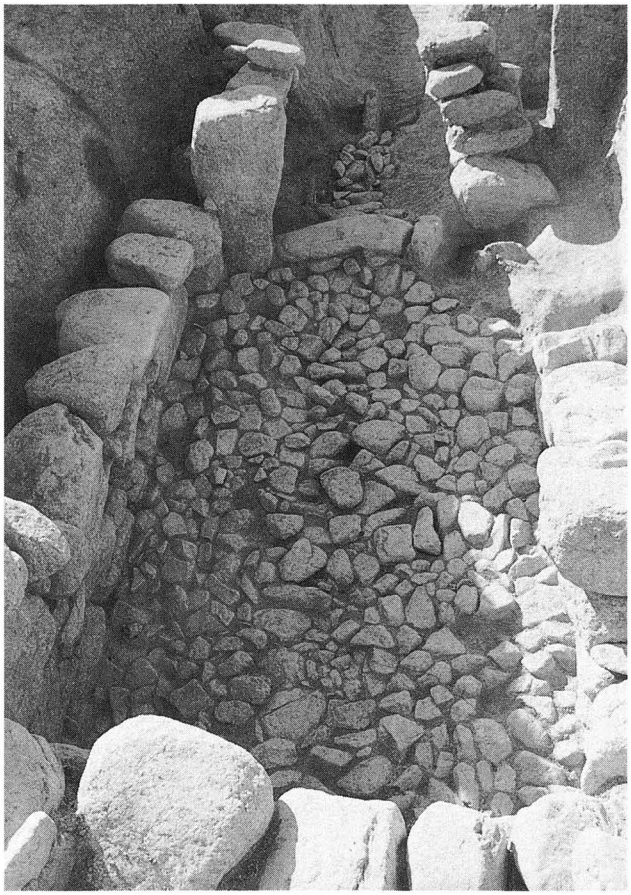
2　玄室遺物出土状況④

図版４

1　玄室遺物出土状況（⑤骨Ｃ）

2　玄室遺物出土状況⑥

3　羨道遺物出土状況

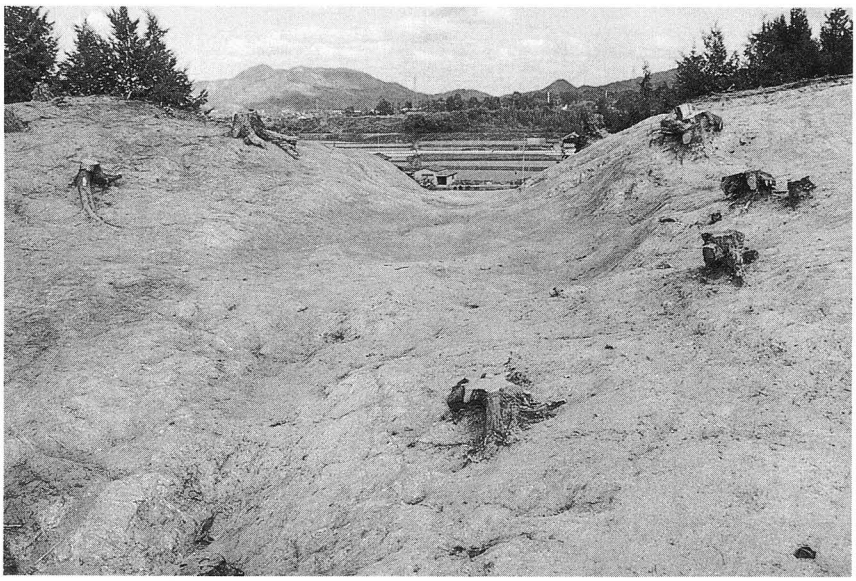


1　玄室礫床検出状況

2　墓道検出状況

図版 6

1　排水溝検出状況



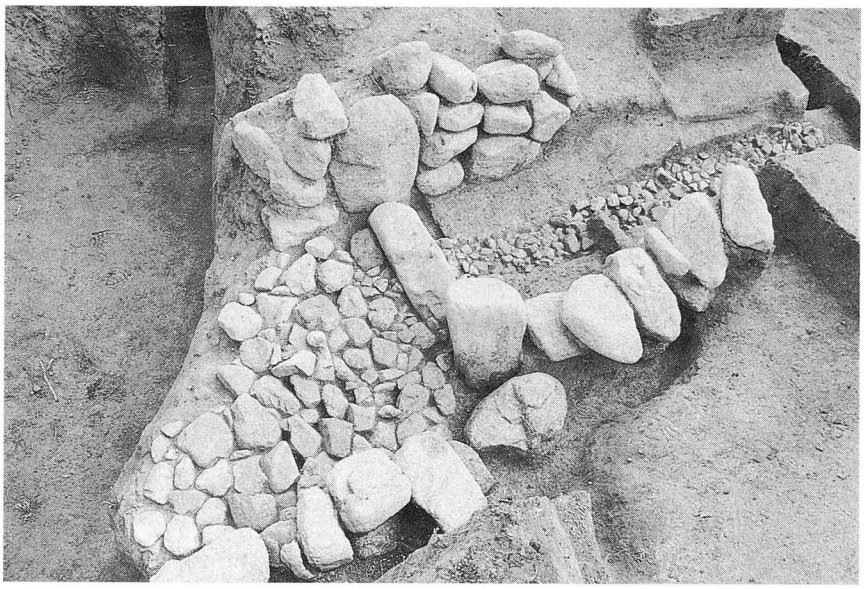
2　周溝完掘状況

1　6号墳調査前状況

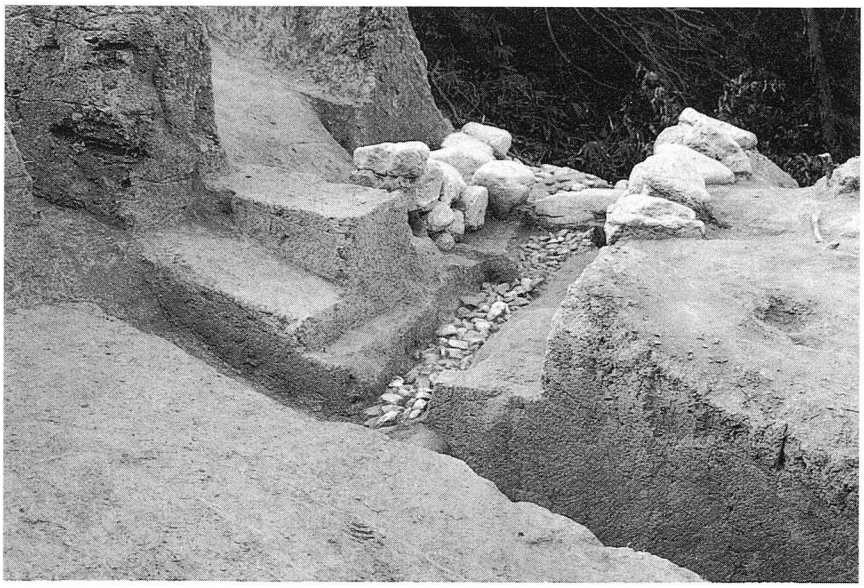
2　横穴式石室調査状況①

3　横穴式石室調査状況②

図版８

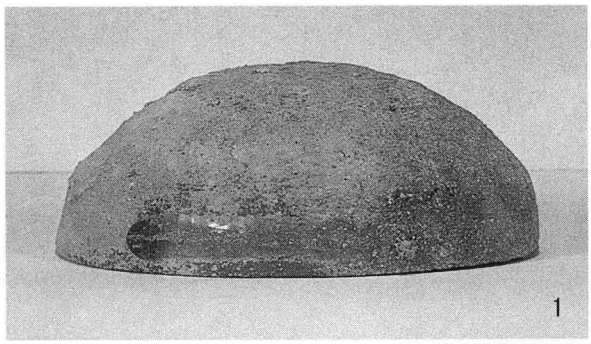


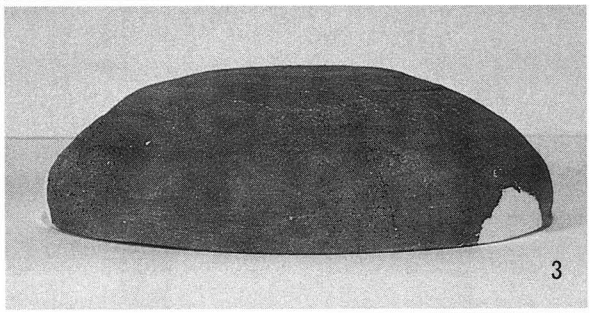
1　横穴式石室検出状況①

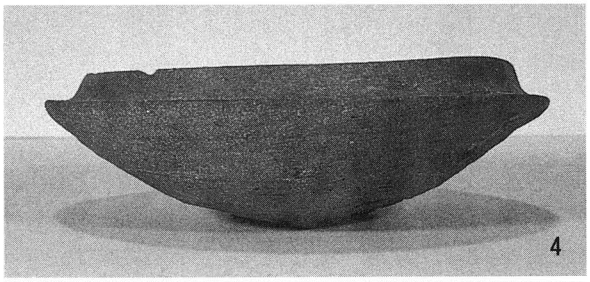


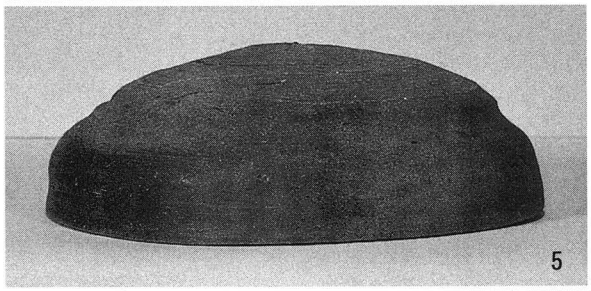
2　横穴式石室検出状況②

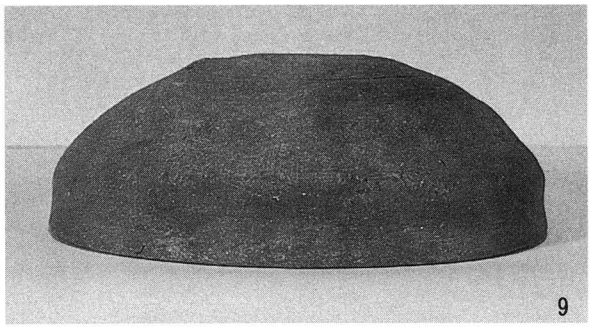
3　6号墳調査後近景

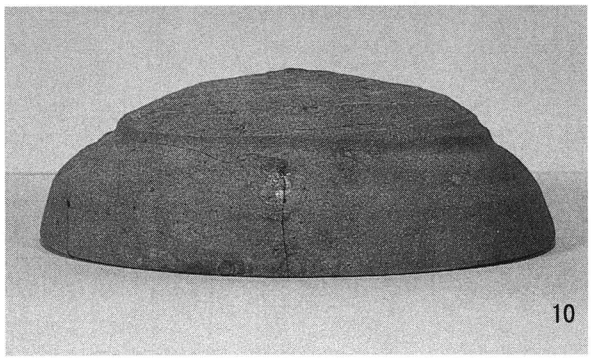


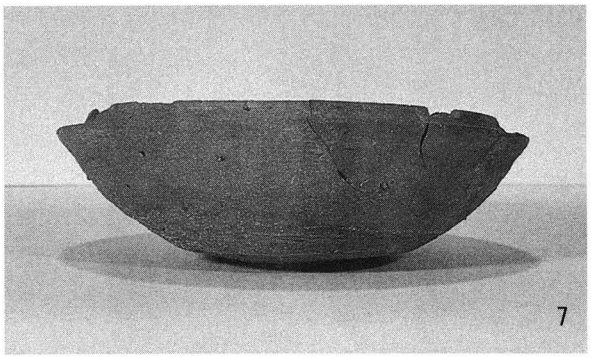


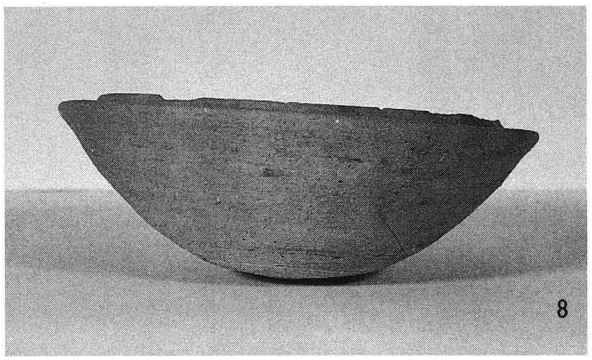






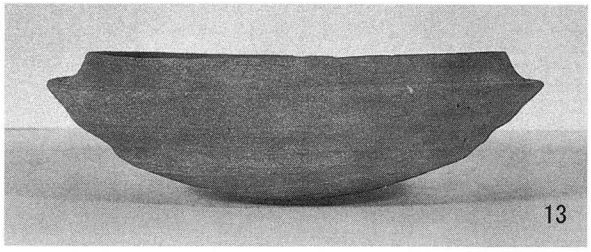


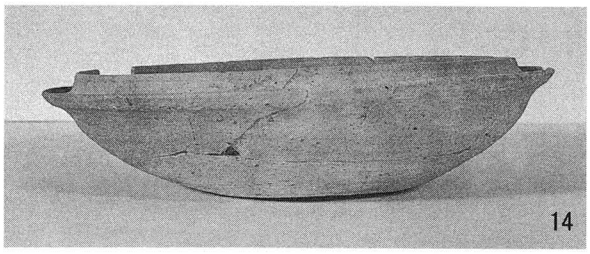


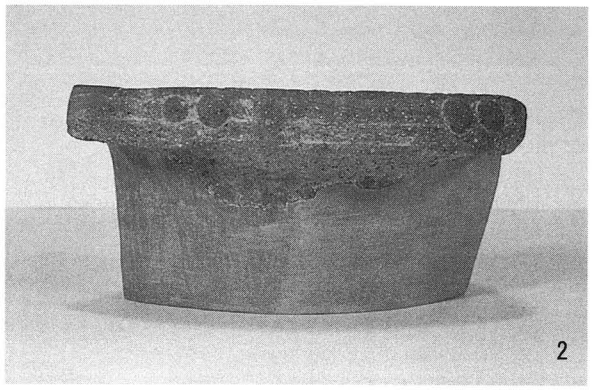


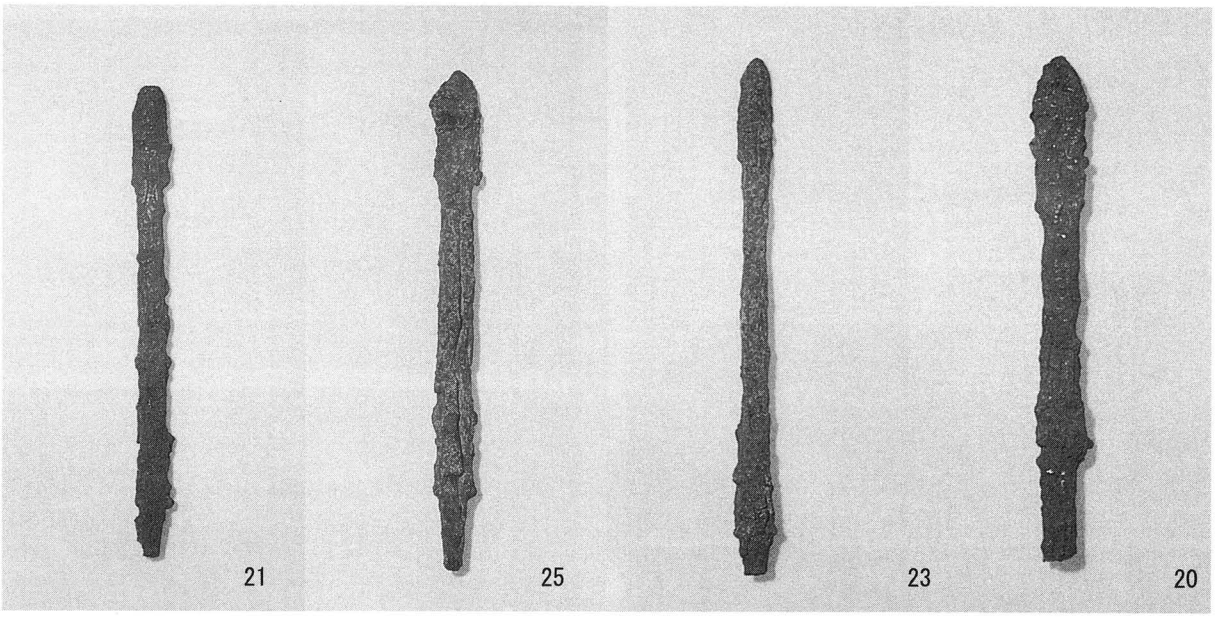
5号墳出土遺物（1）

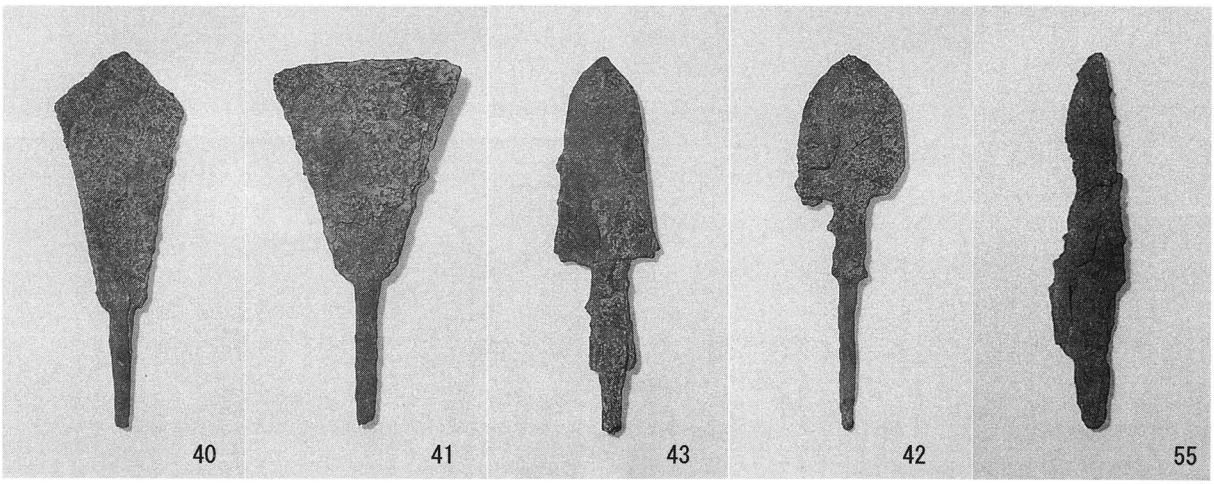
図版10











5号墳出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	みのかみこふんぐん
書　　名	蓑神古墳群
副 書 名	大川南部農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	阿河鋭二
編集機関	大川地区広域行政振興整備事務組合　埋蔵文化財系
発行機関	さぬき市教育委員会
所 在 地	〒769-2401　香川県さぬき市津田町津田138-15　TEL 0879-42-3107
発行年月日	西暦　2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町名	遺跡番号					
みのかみこふんぐん 蓑神古墳群	かがわけん　し 香川県さぬき市 さんがわまちいしだひがしあざ 寒川町石田東字 みのかみこう 蓑神甲1800-9			34° 15′ 4″	134° 18′ 48″	2002. 10. 2 ～ 2003. 1. 17	1,210	大川南部 農免農道 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みのかみこふんぐん 蓑神古墳群	古墳	古墳時代 後期	横穴式石室 周溝	須恵器　土師器　鉄器 耳環　玉類　人骨	７世紀代の群集墳

大川南部農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

蓑神古墳群

2003年３月　発行

編集　大川地区広域行政振興整備事務組合

発行　さぬき市教育委員会

〒769-2401 香川県さぬき市津田町津田138-15

電話　(0879) 42-3107

印刷　ナカハタ印刷株式会社